一般国道140号(寄居町•花園村工区)

埋蔵文化財発掘調査報告

下 南 原

1 9 8 2

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

花園村は、埼玉県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地を有しています。なかでも荒川に沿った河岸段丘上には縄文時代から平安時代にまでいたる遺跡が集中しており、その段丘上を一般国道140号線が熊谷から寄居方面へと走っています。ところが、関越自動車道花園インターチェンジの開業にともない、バイパスが花園村大字黒田から寄居町大字桜沢まで延長4,500mが建設されることになりました。埼玉県教育局文化財保護課では、花園村教育委員会の協力を得て、黒田地区の分布調査を行い、その結果「下南原」遺跡が確認されたのであります。

調査は、埼玉県の委託を受けて、埼玉県教育委員会が直営で、整理作業は、財団法 人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、引き続き県の委託を受け実施したものでありま す。

その結果をまとめたものが本書でありますが、多くの新しい事実が発見されて、記録保存の成果はもとより、これらの資料の数々は、学術研究に資するところが大きいものと思われます。

最後になりましたが、この記録が完成するまでに種々御協力をいただいた花園村教育委員会や地元の方々、埼玉県土木部道路建設課、熊谷土木事務所の方々に深く感謝いたします。

昭和57年3月

財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 理事長 長 井 石 郎

例 言

- 1. 本書は埼玉県大里郡花園村大字黒田に所在する下南原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 調査は一般国道140号線バイパス建設に先だつ事前調査であり、埼玉県教育委員会が調整し、埼玉県の委託により埼玉県教育委員会が主体となり実施したものである。整理、報告書作成作業は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和56年度に受託し、実施した。

なお、調査の組織は2ページに示したとおりである。

- 3. 出土品の整理および図の作成は鈴木敏昭、小島糸子、松村和男が主にあたった。
- 4. 発掘調査における写真は鈴木、山形洋一が、遺物写真は鈴木が撮影した。
- 5. 本書の執筆者は、その執筆分担の文末に氏名を記した。
- 6. 本書に掲載した挿図類の縮尺は原則として次の通りである。
 遺構 住居跡(1/60)、土壙(1/60)
 遺物 土器実測図(1/5)、土器拓影図(1/3)、石器実測図(1/3、1/2)
- 7. 本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団、調査研究部第四課職員があたり横川 好富が監修した。
- 8. 本書を作成するにあたり下記の方々から御教示、御助力を得た。 青木秀雄、石岡憲雄、笠原信男、金子真土、山形洋一

目 次

序	
例言	
I 調査に至る経過	
Ⅱ 遺跡の立地と環境	1
Ⅲ 遺跡の概観	7
Ⅳ 調査の経過	1
Ⅴ 遺構と出土遺物	12
1. 遺 構	12
a. 住 居 跡········	12
b. 土 壙·····	13
2. 遺構出土遺物	19
a. 土 器···································	19
b. 石 器······	29
3. グリッド出土遺物	31
a. 土 器······	31
b. 土 製 品	49
c. 石 器·······	49
VI 結 語······	58
1. <焼石土壙>について	58
2. 下南原遺跡出土土器群の分類と編年	б1
3. 縄文原体の観察	65

4. 土器文様の解読へ向けての序…………67

5. <打製石斧>について………72

挿 図 目 次

第	1	図	下南原遺跡周辺の地形と縄文時代遺跡 S=1/100,000····· 3
第	2	図	下南原遺跡および周辺の縄文時代遺跡 5
第	3	図	遺跡の拡がり(推定)と140号バイパス予定路線図8
第	4	図	発掘グリッドおよび遺構分布図 9
第	5	図	上層図 水糸レベルは標高 75.00 m10
第	6	図	第 1 号住居跡 水糸レベル 73.90 加13
第	7	図	土壙実測図(1) 水糸レベル 73.90 m15
第	8	図	土壙実測図(2) 水糸レベル 73.90 m (16・18~20 のみ 73.70 m)17
第	9	図	第1号住居跡(1~9)、第2号土壙(10~17)、第5号土壙(18~20)、
			第6号土壙(21~23)、第7号土壙(24)、第8号土壙(25)、第10号土
			壙 (26~30)、第13号土壙 (31~32)、第14号土壙 (33~41)、第15号土
			壙(42~45) 出土土器拓影図23
第	10	図	第17号土壙 (46~57)、第18号土壙 (58~68) 出土土器拓影図25
第	11	図	第19号土壙 (69~89)、第20号土壙 (90~91) 出土土器拓影図27
第	12	図	遺物の検出状況31
第	13	図	4 C グリッド出土土器拓影図33
第	14	図	4 C グリッド出土土器拓影図35
第	15	図	4 C グリッド出土土器拓影図37
第	16	図	4 C グリッド出土土器拓影図 ······39
第	17	図	4 C グリッド出土土器拓影図 ···········41
第	18	図	1 Eグリッド (131)、2 Dグリッド (132)、2 Eグリッド (133)、3 A
			グリッド (134~136)、3 C グリッド (137~140)、3 D グリッド(141~
			148)、4 A グリッド (149~156)、4 B グリッド (157~166)、4 D グリ
			ッド (167~168) 出土土器拓影図43
第	19	図	4 C • 3 D グリッド出土土器拓影図 ·······45
第	20	図	第1号土壙(2~3)、第19号土壙(4)、4℃グリッド(1)出土土器実
			測図46

第 21 図	4 C グリッド (5, 6, 8, 9)、4 C・3 D グリッド (7) 出土土器実測図47
第 22 図	土製円板拓影図・・・・・・・49
第 23 図	第 1 号住居跡 (1~3)、第13号土壙(4)、第14号土壙(5)、第15号土
	壙(6)、出土石器実測図52
第 24 図	第15号土壙(7)、第19号土壙(8~9)出土石器実測図53
第 25 図	グリッド出土石器実測図54
第 26 図	グリッド出土石器実測図55
第 27 図	第1号住居跡 (22)、第13号土壙 (23)、第15号土壙 (24)、グリッド (25
	~32) 出土及び調査区外表採(33)石器実測図56
第 28 図	調査区外表採石器・・・・・・57
第 29 図	集落における焼石土壙の空間配置図59
第 30 図	縄文原体組成円グラフ・・・・・・66
第 31 図	下南原遺跡出土土器(第20図1~3)展開模式図69
第 32 図	各遺跡出土土器の展開図集成71
第 33 図	打製石斧の諸属性円グラフ75
第 34 図	打製石斧形状相関図76
	表目次
第 1 表	下南原遺跡周辺の縄文時代遺跡地名表(番号は第2図中の数字と同じ)… 6
第2表	グリッド別縄文原体検出一覧表66
第 3 表	石器計測表73
第 4 表	形態と自然面74

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡全景および土層 (B—B') 図版11 グリッド出土土器(2)、グリッ
- 図版 2 第 1 号住居跡 第 7 号土壙、 第 1 号土壙
- 図版3 第2号、3号、4号、5号、 6号、8号、9号土壙
- 図版 4 第10号、11号、12号、13号、 14号、15号、16号、17号土壙
- 図版 5 第18号、19号、20号、21号、 22号、23号土壙
- 図版 6 十器(1)
- 図版7 土器(2)、土器(3)
- 図版8 土器(4)、遺構出土土器(1)
- 図版 9 遺構出土土器(2)、遺構出土土器(3)
- 図版10 遺構出土土器(4)、グリッド出 土土器(1)

- 図版11 グリッド出土土器(2)、グリッ ド出土土器(3)
- 図版12 グリッド出土土器(4)、グリッド出土土器(5)
- 図版13 グリッド出土土器(6)、グリッド出土土器(7)
- 図版14 グリッド出土土器(8)、グリッド出土土器(9)
- 図版15 グリッド出土土器(10)、グリッド出土土器(1)
- 図版16 グリッド出土土器(12)、グリッド出土土器(13)
- 図版17 遺構出土石器、グリッド出土石器(1)
- 図版18 グリッド出土石器(2)、調査区 外表採石器

Ⅰ 調査に至る経過

埼玉県では、増大する交通量に対処するため各種の道路建設工事を進めているが、一般国道 140 号線でも関越自動車道の建設等に伴い、寄居町、花園村地内でバイパスの建設が計画された。

県教育局文化財保護課では、開発関係部局と各種の協議を実施しており、文化財保護と開発事業 との調整を図っている。今回の事業の担当課である県土木部道路建設課とも同様の調整は進めてい た。

道路建設課から路線内の文化財の所在について文化財保護室(当時)あて照会があったのは、昭和48年12月17日付け道建第1103号をもってであった。これに基づいて文化財保護室では分布調査を実施した結果、縄文時代の集落跡及び古墳群が所在することが確認された。この結果を検討して、昭和49年5月28日付け教文第905号をもって、1.文化財は現状保存することが望ましい。2. やむを得ずかかる区域については発掘調査を実施されたい。という主旨で道路建設課あて回答した。

その後,文化財保護課と道路建設課では保存策について種々の調整がなされたが,路線変更は不可能となったため,やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。路線内には小前田古墳群をはじめ4か所の遺跡が確認されているが,これらの遺跡について改めて発掘調査のための協議を開始した。

4か所の遺跡のうち花園村黒田地内の上南原遺跡については昭和52年度に調査を実施しているが、他の3か所についても、早期調査の要望があった。道路建設課からは昭和53年4月10日付け道建第45号をもって調査についての協議書が提出された。文化財保護課では内部調整を図りつつ、道路建設課と協議を進め、昭和53年5月19日付け教文第65号をもって回答した。

その内容は次のとおりである。

- 1. 調 査 機 関
- 2. 調 查 範 囲
- 3. 調 査 費 用
- 4. 調 查 期 間
- 5. 調 査 体 制
- 6. そ の 他

これに基づき発掘調査は文化財保護課が執行委任を受けて実施することになった。

文化財保護法に基づき埼玉県知事からは埋蔵文化財発掘通知が、県教育長からは埋蔵文化財発掘 調査通知が文化庁長官へ提出され,昭和45年1月15日から発掘調査は開始された。

文化庁からは53委保記第17-2136号をもって調査通知を受理した旨の通知があった。

(井上尚明)

発掘調査の組織

1.	発	掘									
	主体	者	埼玉県教育委員会	教	育	Ī	長	石	田	正	利
	事 務	局	埼玉県教育局文化財保護課	課			長	杉	Щ	泰	之
				課	長	補	佐	秋	葉		男
	企画調	問整	埼玉県教育局文化財保護課	文亻	匕財貧	第二 例	系長	早	JII	智	明
								柿	沼	幹	夫
								駒	宮	史	朗
								本	間	岳	史
	庶務經	E 理	埼玉県教育局文化護保護課	庶	務	係	長	長	谷」	I	清
								太	田	和	夫
								千	村	修	平
	発	掘	埼玉県教育局文化財保護課	文化	匕財貨	第三年	系長	横	JII	好	富
								鈴	木	敏	昭
								市	JII		修
		~									
2.	整	理									
2.	整主体		埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理	事	1	長	長	井	五.	郎
2.			埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理副	理	事	長長	沼	井尻	五和	郎也
2.			埼玉県埋蔵文化財調査事業団								
2.		者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	副	理	事	長	沼	尻	和	也
2.	主体	者		副常	理務	事理	長事	沼渡	尻辺	和澄	也夫
2.	主体	者		副常	理務	事理	長事	沼渡伊	尻 辺 藤	和澄悦	也夫光
2.	主体	者		副常	理務	事理	長事	沼渡伊関	尻 辺 藤 野	和澄悦	也夫光一
2.	主体	者		副常管	理務理	事理	長事長	沼渡伊関福		和澄悦栄	也夫光一浩
2.	主体庶務経	者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	副常管調	理務理	事理部	長事長長	沼渡伊関福本	尻辺藤野田庄	和澄悦栄朗	也夫光一浩人
2.	主体庶務経	者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	副常管調	理務理	事理部	長事長長	沼渡伊関福本横	尻 辺 藤 野 田 庄 川	和澄悦栄朗好	也夫光一浩人富

3. 協力者

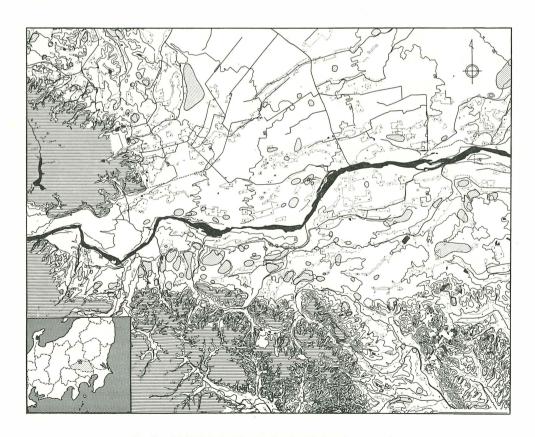
大里郡花園村教育委員会, 地元区長及び地元住民

Ⅱ遺跡の立地と環境

下南原遺跡は大里郡花園村大字黒田字北原472に所在し、丁度、秩父鉄道永田駅の西北西1.0km、また、関越自動車道花園インターチェンジの北方0.5kmの地点に当っている。昭和46、47年度に埼玉県教育委員会が実施した分布調査の際には未確認であったが、今回140号バイパスの開通に伴い新たに発見された遺跡である。とりあえず、遺跡に立って周囲を眺めてみよう。

遺跡の南前方には東流する荒川が眼下に望まれ、背後には、妙義、榛名、赤城の両毛三山が優美に、そして威風堂々と聳えているのが遠望される。西には秩父の山々が峰を連ね、その裾野は遺跡から約4㎞の近くにまで迫っている。そして東方には関東平野が延々と扇を広げているのである。下南原の地に集落を営んだ縄文中期人はこうした景観の中に寝起きしていたのであったろうことは想像に難くないが、さらに彼らの居住誘因を立地と環境を検討しながら考えてみようと思う。

ところで、花園村は、江戸時代には秩父往還、あるいは上州、信州方面へ至る中山道の脇往還の 間屋場として栄えた小前田宿を有し、交通の要衡としての一定の役割を果たしてきた。小前田駅周 辺の街道筋には今なお、その面影の一端が偲ばれる。産業としては、とりわけ養蚕の町として、そ の名を全国に轟かせていたが、近年は、養豚、花卉園芸などの東京への出荷が農業経営の中心とな



第1図 下南原遺跡周辺の地形と縄文時代遺跡 S=1/10,000

り、県内でも有数の近郊農業地帯となっている。関越自動車道花園インターチェンジの開業、そして 140 号バイパスの相継ぐ開通は、さらにこうした傾向に拍車をかけており、現在は、急速に都市 化の波が打ち寄せつつある状況にある。

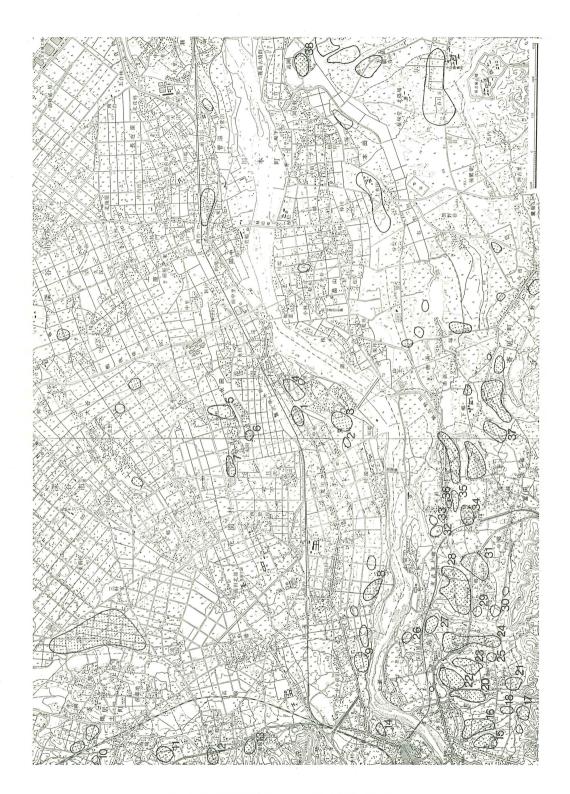
一方、花園村は荒川北岸の扇状地上にのっている関係から、干ばつの害を受けやすく、井戸掘りに多くの力を割かなければならないという苦難の歴史を有している。今では農業用排水等の整備が進み、こうしたことは忘れ去られつつあるが、我々の発掘調査に協力してくれた作業員の中にも何人かは井戸掘りの経験を持っており、時折、話題にのぼったものである。こうした自然の環境は、ある意味では運命的でさえあっただろう。彼らの生き様は我々に貴重な経験として限りない興味を喚起させずにはおかない。

さて、下南原遺跡は荒川がつくる寄居鉢形段丘(荒川段丘)上にのっている。秩父山地に淵源す る荒川は皆野町から寄居町付近までは、景勝地長瀞の岩畳で象徴されるごとく、結晶片岩からなっ ており、川幅も狭く、河原の発達は貧弱で、狭谷地形をなしている所が多い。だが、寄居を下ると 徐ろに川幅を広げ、流れが緩やかになり、河原も発達し、広くなる。花園村黒田付近では河原まで 含めれば、川幅が200~300mの箇所も少なくない。寄居鉢形段丘は、こうした場所に形成された河 岸段丘であり、櫛挽原台地の南縁を刻む河岸段丘と右岩側の櫛挽原面に相当する上位段丘面を含め ての河岸段丘を併せた部分を総称する。左岸側には中位段丘が2段と局部的な下位段丘が1段の合 計3段あり、右岸側には上、中、下の各段丘が合計3~4段形成されている。下南原遺跡は、その うち左岸の下から3段目である中位段丘(GtⅡ)上に占地している。土地自体は表土まで砂礫が多く、 調査時には多大な困難を伴ったが、遺跡南端の段丘崖からは常時、湧水があり、居住地としては適 地であったことが窺える。同様の立地環境にある既掘の縄文時代遺跡を花園村内に限ってピックア ップしてみると、前期の上南原遺跡、中期の台耕地遺跡、後・晩期の橋屋遺跡をあげることができ る。いずれも集落としての規模は大きいようである。中でも台耕地の地は、縄文時代以降も古墳群 (黒田古墳群)として、さらに製鉄工人の大集落として、しばしば人々の占地の対象となってきた。 なお、寄居に到ると縄文時代前・中期の大集落である北塚屋遺跡も筆者らによって調査 されてい る。こうした遺跡は、いずれも荒川によって育くまれた集落と総括できるのではなかろうか。

ところで、柿沼氏は、櫛挽台地周辺の縄文時代の遺跡群をマッピング処理することによってA~Dの4グループに分け、それらに共通する遺跡立地のあり方を(扇端湧水の集中地帯)=(縄文時代の遺跡の集中地帯)という図式にまとめた(柿沼1979)。氏によれば荒川左岸の段丘上に存在するものはDグループとされた。従って、前記した下南原遺跡をはじめとする諸遺跡はすべてDグループに属することは言うまでもない。

このように、縄文時代の集落立地にスポットを当てた研究は、その重要性にもかかわらず、比較的実践例が少ない。縄文人の生業活動の一端を垣間見る為の一要素として、また集団移動及び地域 組織の追求の上でも欠かせない必須の作業であることを確認しておこう。

第1図は下南原遺跡を中心として埼玉県教育委員会発行の『埼玉県遺跡地図』(埼玉県教育委員会1975)を基礎とし、「大里郡寄居町東遺跡発掘調査報告」(梅沢1973)、『甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡』(並木1978)を参照しながら、縄文時代の遺跡を地形図上におとしたものである。櫛挽原台地



第 2 図 下南原遺跡および周辺の縄文時代遺跡

上と寄居鉢形段丘上との遺跡の集中度の相違には圧倒的なものがある。すなわち、寄居鉢形段丘上は縄文人の生活環境としては好適の地であったことが窺い知れるのである。

だが一方で、荒川の左岸と右岸の遺跡密集度の相違も同時に注意される。右岸の露梨子台、上の原台を中心に赤浜に到る地域は縄文集落が目白押しに、あたかも連っているかのごとく観察される程、河岸段丘上に集中占地している。何が彼らをして、これ程までにこの地への居住を誘ったのだろうか。勿論、湧水の集中度も一因ではあろう。だが、左岸と右岸の差はそれのみとは思われない。あるいは背後に不毛な扇状地をもつか、動植物の豊かな宝庫である森林をもつかという相違の反映かも知れない。いずれにしろ、こうした方向への取り組みは、生活単位領域を認識することへもつながる、今後の大きな課題である。

(鈴木敏昭)

第1表 下南原遺跡周辺の縄文時代遺跡地名表 (番号は第2図中の数字と同じ)

1. 下南原遺跡 (中期) 2. 上南原遺跡 (前期) 3. 台耕地遺跡 (前・中期) 4. 宮台遺跡 (中・後期) 3. 宮林遺跡 (不詳) 6. 西上遺跡 (中期) 7. 東大塚遺跡 (中期) 8. 橋屋遺跡 (中・後・晩期) 9. 北塚屋遺跡 (前・中・後期) 10. 上宿遺跡 (不詳) 11. 高城遺跡 (中期) 12. 谷津遺跡 (中期) 13. 金獄遺跡 (中期) 14. 岩崎遺跡 (前・中期) 15. 氷川台遺跡 (中期) 16. 薬師台遺跡 (前・中期) 17. 愛宕山東遺跡 (中・後期) 18. 八幡台遺跡 (中期) 19. 町田耕地遺跡 (後期) 20. 東遺跡 (中・後期) 21. 上の原遺跡 (早・中期) 22. 甘粕原遺跡 (早・前・中期) 23. ゴシン遺跡 (早・前・中期) 24. 露梨子遺跡 (中・後期) 25. 大塚遺跡 (中・後期) 26. 羽毛田遺跡 (後期) 27. 日向上遺跡 (前・中期) 28. むじな塚遺跡 (中期) 29. 上郷西遺跡 (前期) 30. 上郷A遺跡 (不詳) 31. 東原遺跡 (後期) 32. 昌国寺遺跡 (後期) 33. 常楽寺南遺跡 (後期) 34. 伊勢原遺跡 (中期) 35. 宮の前遺跡 (中期) 36. 南側上町遺跡 (中期) 37. 庚申塚遺跡 (中・後期) 38. 舟山遺跡 (早・前・中・後期)

Ⅲ遺跡の概観

遺跡は荒川左岸の中位段丘上にのる。段丘崖付近は南東方向に傾斜が若干強くなる傾向はあるものの、全体的には平坦な地形である。この段丘は旧流跡を含むと思われる、比高差の少ない、小さな谷を経て、さらに平坦な扇状地地形である櫛挽原台地へと広がりを示す。微視的には、遺跡の部分は東へ舌状に張り出した、わずかな高台上にのる。段丘下の水田面との比高は約5mを測る。荒川の河原からは約15mの比高差を持ち、見晴らしは良好である。なお、段丘崖からは常時、湧水があり、居住地としては好適地であったことが推測される。

現在、遺物が散布する地点は、段丘崖にほぼ沿って、幅約150m、長さ約250mの範囲にわたる。 集落の形もほぼ同様となるのであろう。それは、後述する遺構の検出状況からも裏付けられると考 えられる。採集された遺物の時期は、ほとんど例外なく、縄文時代中期の加曽利E式に属する土器 片であった。その散布の密集度の高い部分は今回の調査地よりも西方に寄った部分であった。

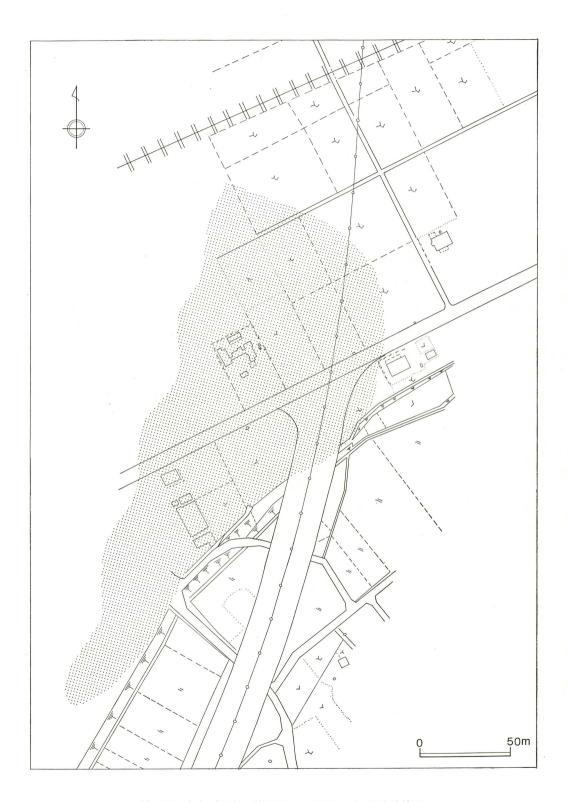
路線は、この遺跡の南東端部をほぼ南北に横切る。だが、今回は種々の事情で路線の南半分、すなわち、現在の 140 号以南に限って調査を進めることになった。発掘グリッドは第4図のごとく設定した。一辺は10mである。検出された遺構は、住居跡が1 軒、土壙が23基で、いくつかの不詳土壙を除いて、いずれも縄文時代中期に属する。検出区は2 C、3 A~3 C、4 A~4 Cに片寄っており、それは今回の調査区の北西端に当る。すなわち集落の限界が確認されたと言えようか。ここで、調査成果と立地する地形等を鑑みると、下南原の集落は大部分が調査区の西方に埋もれていることが予測されるのである。

なお、下南原遺跡の土層図を第5図に示したが、図中のセクションポイント AA'、BB'は第4図の AA'、BB'と等しい。以下に各層の説明を簡単に記す。

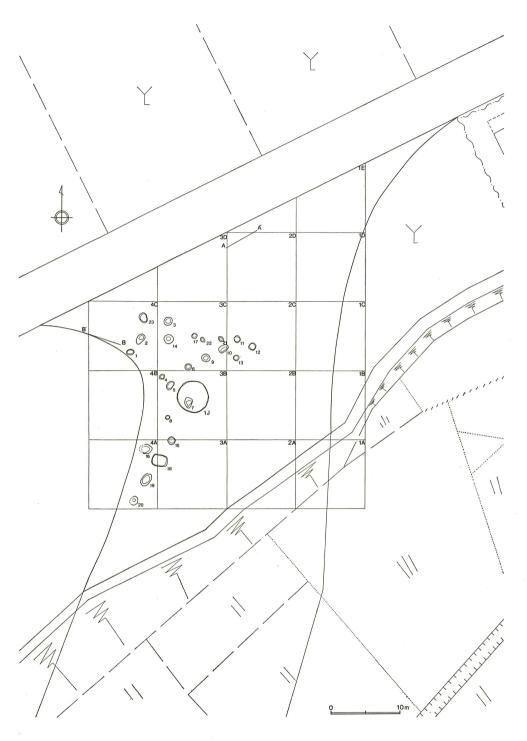
- 第1層 明るい茶褐色の耕作土層である。
- 第2層 黒味がかった茶褐色土層である。粒子は粗いが、ややしまりのある土層で、若干の土器 片を含む。
- 第3層 黒褐色土層で最も大量の土器片を含む。本土層が縄文時代の遺物包含層である。第2層 に比して、全体的にしまりに欠ける。径2~5cmの小礫を含む。
- 第4層 褐色ないし暗褐色をしたかなり砂質に富んだ土層である。第3層よりさらに多くの礫を 含んでおり、しまりは全くない。断面を切る際にも大部ボロボロと崩れた程である。土器 片も若干含む。部分的にみられる土層であり、自然の堆積とは思えないふしもある。

ほぼ基本層序は以上のようであるが、以下さらに灰褐色砂層と我々が調査時に仮称した、砂利を 多量に含んだ土層があり、遺構はその部分で確認された。だが、極めて調査区が小範囲にもかかわらず、遺構確認面の土層は砂質の部分と礫の多い部分が複雑に入り組んでおり、調査に困難をきた した。段丘地形の特徴であろうか。黄褐色のローム層は全く認められなかった。

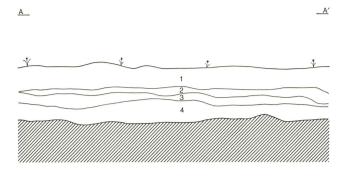
(鈴木敏昭)

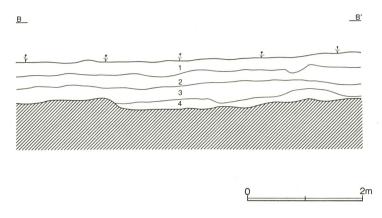


第3図 遺跡の拡がり(推定)と140号バイパス予定路線図



第4図 発掘グリッドおよび遺構分布図





- I. 明茶褐色耕作土層 2. 黒茶褐色土層
- 3. 黒褐色土層
- 4. 暗褐色土層

第5図 土 層 図 水糸レベルは標高75.00m

Ⅳ調査の経過

- 1月16日 現地で発掘調査対象部分の確認をした後、担当者の立ち合いのもとで、重機による表 土の除去作業に入る。そして、グリッドの設定をする。
- 1月17日 手作業による遺構確認の為の表土剝ぎに入る。礫の含有量が異常に多い部分もあり、 調査に前途多難を思わせる。1E、1D、2D、3D、4D、1Cの各グリッドと2Cの一部が剝 ぎ終わる。本日の遺物出土量は極めて貧弱であり遺構の検出はなかった。
- 1月18日 遺構確認作業。2C、3C、4C、5C、1B、2B、3Bの一部まで進む。昨日に比べ、本日の遺物出土量は4Cグリッドを中心に夥しいものがあった。とりわけ、完全に口縁部のめぐる2個体の土器を埋設した1号土壙の検出は作業員の士気昂揚につながった。他にも、3号とした焼石による集石土壙をはじめ13基の土壙が検出された。
- 1月19日 表土剝ぎが終了する。3 Bグリッドにおいて唯一の住居跡が検出された。土壙はさらに8 基増える。つまり、本日の段階では、住居跡が1軒と土壙が22基検出されたわけである。
- 1月22日 土壙の発掘に入る。1号土壙の平面図とセクション図、3号土壙の集石を含む平面図とセクション図をとる。
- 1月23日 引き続き土壙の調査。並行して住居跡の調査にも入る。遺物の出土は少なく、一日で 完掘する。炉、柱穴も検出不能だった。当住居跡はさらに7号土壙にも切られていた。
 - 1月24日 継続して土壙の調査。A-A'のセクションをとる。
 - 1月25日 継続して土壙の調査。B-B'のセクションをとる。
- 1月26日 土壙を掘り進める。完掘順に今日から写真撮影に入る。1号、2号、3号、14号、17号、22号、23号土壙まで終了。
 - 1月29日 土壙の発掘と写真撮影。6号、9号、10号、11号、12号、13号、21号土壙まで終了。
- 1月31日 土壙の発掘は20号を最後に完了し、今日からは実測と写真撮影に専念する。撮影は4号、5号、7号、8号、15号、16号の各土壙と1号住居跡が終わる。実測は1~3号、6号、9号、14号、17号、22号、23号土壙の平面図及びエレベーションをとる。
- **2月1日** 18~20号土壙の写真撮影をする。 7号、10~13号、21号土壙及び1号住居跡の平面図とエレベーションをとる。
 - 2月2日 4号、5号、8号、15号土壙の平面図及びエレベーションをとる。
- **2月5日** 16号、18号、19号、20号土壙の平面図及びエレベーションをとる。さらに、全体を清掃後、調査区の全景写真をとる。
 - 2月7日 図面の総点検をし、不備な部分の補正と修正を加え、全ての作業を終了させる。

(鈴木敏昭)

Ⅵ 遺構と出土遺物

1. 遺 構

遺構は、住居跡 1 軒、土壙23基が検出された。第4図のように分布している。これらの遺構は第4層上面及び4層が部分的に欠けている場所では地山の砂利を多量に含む砂層で検出された。4層も非常に礫を多く含む層のため、遺構写真にみられるように礫・小石等が露出しているが実測図としては表現していない。プランは、礫を含む層中に黒色の落ち込みを呈するため比較的確認しやすかった。

検出された23基の土壙を、平面形、断面形により、分類をおこなった。あらかじめ分類基準を以下に記しておく。

平面形

- Ⅰ 円形及び準じる形、長径と短径の比が0.90以上のもの
- Ⅱ 楕円形
- Ⅲ 長方形
- IV 不定形

断面形

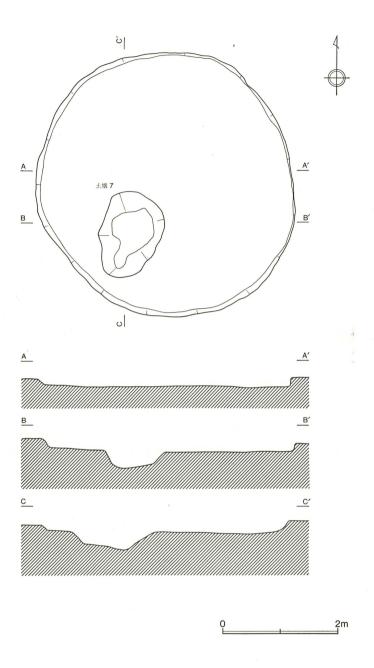
- A 開口部より底部が小さく、逆台形を呈する平底のもの、いわゆる円筒型を含む。
- B 開口部より底部が小さく、立ち上がりが浅く皿状を呈するもの。長径と深さの比が 場末満の もの。
- C 二段の底を有するもの
- D 立ち上がりが一方に偏より、底面が丸底状のもの

なお、今回の発掘区は遺跡の南東部の端にあたり、同方向への傾斜がみられる。そこで、土壙の 基軸方向から等高線に対する位置関係も調べることにし、個別の説明中に記載した。

a 住居跡

第1号住居跡(第6図)

3 Bグリッドにおいて検出された。本遺跡の南東に位置し、これより外側には、遺構は確認されなかった。遺物の散布状態、地形等からも集落の端に位置する住居跡と思われる。本住居跡は第7号土壙によりきられている。床面は平らであるが、砂利層に掘り込まれているため、小石が露出しており、軟弱である。従って、柱穴、炉址等は検出不能だった。壁高は斜面のため、南側が浅く、10~20㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるがもろい。遺物は縄文中期の土器が30片、石器が打製石斧3点、石鏃1点出土している。



第6図 第1号住居跡 水糸レベル73.90m

b 土 壙

第1号土壙(第7図)

4 C グリッドで検出された。プランはII-B型である。長径 $1.15m \times 0.79m$ 、深さは16cmを測る。 長軸方向は $N-90^\circ$ -Wを示し、等高線に対して斜位に位置する。

本土壙は、胴下半を切断した深鉢が正位の状態で並べられていた。また、約20cm離れた南側には胴上半が復原された土器があり、この地区に土器片が、総破片数の½強を占める程集中していた。そのため、住居跡の可能性も考えられ、埋甕としての用途が考えられたため、B-B'のセクションをとったが、掘り込みのプランは確認できなかった。他の遺物は検出されなかった。

第2号土壙(第7図)

4 C グリッドにおいて検出された。プランはII-D型である。長径 $1.62m \times$ 短径1.0m、深さは南側が浅く、最深部で約17cmを測る。長軸方向は $N-28^{\circ}-E$ を示し、等高線に対して並行である。

しかし、堆積状態から、本土壙は風倒木痕と思われる。遺物は縄文中期の土器が6片出土している。

第3号土壙(第7図)

3 C グリッドにおいて検出された。プランは I -B 型である。長径1.21m \times 短径1.15m、深さは 27cm を測る。長軸方向は N -90 $^{\circ}$ - Wで、等高線に対して斜位に位置する。

本土壙の上面に集石が検出された。こららの礫は割れたり、赤変しており、熱を受けた状態を示していた。また堆積土中にも炭化物粒子を多く含み、炉としての使用が考えられた。縄文前、中期に多くみられる集石炉としての機能が考えられる。集石炉は、住居跡に近接して発見されており、用途として遺物等から屋内の土器を利用した煮沸とは違う、蒸し焼き料理等の施設として考えられるが、非日常的な機能も有していたものかは明瞭ではない。本土壙は他の遺物が検出されなかったため、用途も詳らかにできない。

第4号土壙(第7図)

3 Bグリッドにおいて検出された。プランは I-B型である。長径0.78m×短径0.73m、深さは 20cmを測る。長軸方向は $N-90^\circ-W$ を示し、等高線に対して、斜位に位置する。遺物は検出されなかった。

第5号土壙(第7図)

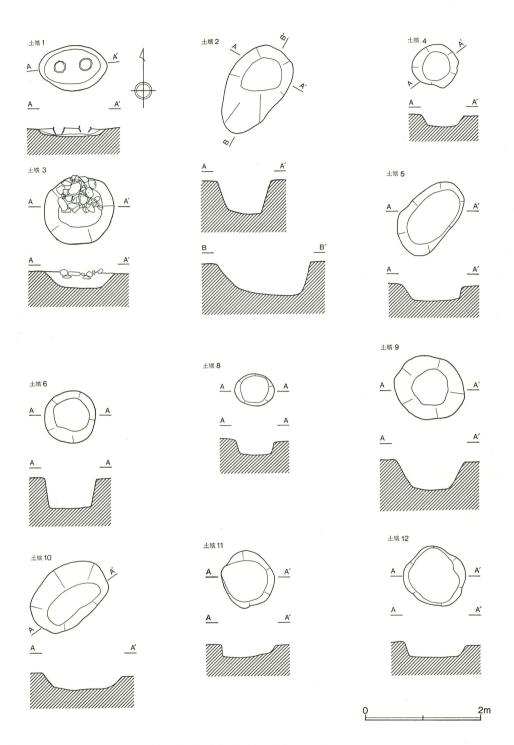
3 Bグリッドにおいて検出された。プランは Π -B型である。長径 1.4m×短径 0.82m、深さは 24cmを測る。長軸方向は N-41°-E を示し、等高線に対して並行に位置する。遺物は縄文中期の +器が 7 片出土している。

第6号土壙(第7図)

3 C / J y yドにおいて検出された。プランはI-A型である。長径 $0.9m \times$ 短径0.88m、深さは50cmを測る。円形のため長軸方向及び等高線に対する位置に関しては述べられない。遺物は縄文中期の土器が3片出土している。

第7号土壙(第7図)

3 Bグリッド、1 号住居跡内において検出された。堆積状態から本土壙が住居跡をきっているた



第7図 土壙実測図(1) 水糸レベル73.90m

め新しい。プランはIV-C型である。長径1.5m×短径1.04m、深さは $35\sim54cm$ を測る。長軸方向はN -17° -Eを示し、等高線に対して並行であるる。遺物は縄文中期の土器が 1 片出土している。

第8号土壙(第7図)

3 Bグリッドにおいて検出された。プランはII-B型である。長径0.68m×短径0.55m、深さは25cmを測る。長軸方向は $N-90^\circ-W$ を示し、等高線に対して斜位に位置する。遺物は縄文中期の土器が、片出土している。

第9号土壙(第7図)

3 C グリドッドにおいて検出された。プランは I — A 型である。長径1.19 m 短径1.1 m 、深さは55 cm を測る。長軸方向は N — 90 $^{\circ}$ — W $^{\circ}$ 、等高線に対して斜位に位置する。遺物は検出されなかった。

第10号土壙(第7図)

 $2 \text{ C} \cdot 3 \text{ C}$ グリッドのライン上に検出された。プランはII-D型である。長径 $1.37m \times$ 短径0.99m、深さは29cmを測る。長軸方向は $N-54^\circ-E$ で、等高線に対して並行に位置する。遺物は縄文中期の十器が12片出土している。

第11号土壙(第7図)

2 C グリッドにおいて検出された。プランはI-D型である。長径 $0.99m \times$ 短径0.93m、深さは 20cmを測る。長軸方向はNを示し、等高線に対して斜位に位置する。遺物は検出されなかった。

第12号土壙(第7図)

2 C グリッドにおいて検出された。プランは I - B 型である。長径 $1.07m \times$ 短径0.96m、深さは 25cm を測る。長軸方向は $N-50^{\circ}-W$ を示し、等高線に対して直交する位置にある。遺物は検出されなかった。

第13号土壙(第8図)

2 C グリッドにおいて検出された。プランは I -A 型である。長径 0.82m \times 短径 0.9m、深さは 36cm を測る。長軸方向は N を示し、等高線に対して斜位に位置する。遺物は縄文中期の土器が 2 片、石器は打製石斧 1 点、フレーク 1 点が出土した。

第14号土壙(第8図)

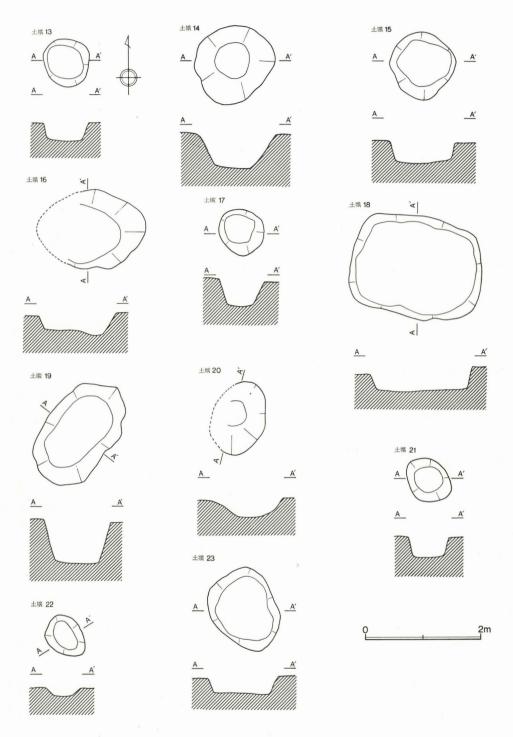
3 C グリッドにおいて検出された。プランは I 一 A 型である。長径 1.39m × 短径 1.34m、深さは 36cm を測る。長軸方向は N 一 90° 一 W を示し、等高線に対し斜位に位置する。遺物は縄文中期の土器が 14 片、石器は打製石斧 1 点が出土している。

第15号土壙(第8図)

 $3 \text{ A} \cdot 3 \text{ B}$ がリッドのライン上に おいて 検出された。プランは I-D 型である。径は $1.16m \times 1.16m$ 、深さは36cmを測る。円形のため、長軸方向及び等高線に関しては述べられない。遺物は縄文中期の土器が15片出土している。出土石器は3点。

第16号土壙(第8図)

4 A がリッドにおいて検出された。遺構が発掘区域外に及んだため全掘できなかったが、プランはII-C型を呈すると思われる。長径1.9?m×短径1.34m、深さは $23\sim36cm$ を測る。長軸方向はIV-90°-Wを示すと思われる。等高線に対して斜位に位置する。遺物は検出されなかった。



第8図 土壙実測図(2) 水糸レベル73.90m (土壙16・18~20は73.70m)

第17号土壙(第8図)

3 C グリッドにおいて検出された。プランは I 一 A 型である。長径 0.8m × 短径 0.77m、深さは 44cm を測る。長軸方向は N を示し、等高線に対して斜位に位置する。遺物は縄文中期の土器が22片出土している。

第18号土壙(第8図)

第19号土壙(第8図)

4 A / J ッドにおいて検出された。プランは $\Pi - \text{A}$ 型である。長径は $1.95m \times 1.17m$ 、深さは70 cm を測る。長軸方向は $N-41^{\circ}-E$ を示し、等高線に対して並行に位置する。遺物は縄文中期の土器が73片、石器は打製石斧 1 点、フレイク 1 点が出土している。

第20号土壙(第8図)

4 A / J J J F C F C C E おいて検出された。遺構は発掘区域外にも及んだため全掘できなかった。プランは $\mathbb{I} - \mathbb{D}$ 型を呈すると思われる。長径 $1.29m \times$ 短径 0.95?m、深さは 30cm を測る。長軸方向は $\mathbb{N} - 14$ ° $- \mathbb{E}$ を示し、等高線に対して並行に位置する。遺物は縄文中期の土器が 2 片出土している。

第21号土壙(第8図)

3 C グリッドにおいて検出された。プランはII—A型である。長径0.88m×短径0.68m、深さは35cmを測る。長軸方向は $N-47^{\circ}$ —Wを示し、等高線に対して並行に位置する。遺物は検出されかなった。

第22号土壙(第8図)

3 C グリッドにおいて 検出された。プランはII-B型である。長径 $0.8m \times$ 短径0.57m、深さは 17cmを測る。長軸方向は $N-39^\circ-W$ を示し、等高線に対して直交する位置にある。遺物は検出されなかった。

第23号土塘 (第8図)

4 C グリッドにおいて検出された。プランはII—B型である。長径I.4m×短径I.1m、深さは27 cmを測る。長軸方向は N-36°—W を示し、等高線に対して直交する位置にある。遺物は検出されなかった。

以上の遺構の多くは、遺物の出土が皆無か、あるいは少ない為に時期決定に不明瞭さを残すところがある。従って、全てが下南原集落に所属していたと断定し得る根拠は乏しいと言わざるをえない。だが、集落の南東端部としての位置付け、役割等は、今後、下南原集落の全貌が発掘調査等により、明らかにされた時点で、時期の問題に矮少化されない、別の時限での重要さが増すことと思われる。

(小島糸子)

2. 遺構出土遺物

土器、石器共に出土量が豊富とは言えない。土器片などはむしろ微細なものが多く、時期判定等に困難が伴うことが多かった。だが第1号土壙出土の2個体の胴上半部深鉢は以下に詳述するごとく極めて貴重な資料と言える。石器は第1号住居跡で4点検出されたが、その出土状態には特記する点は認められない。

a. 土 器

出土土器については以下のような観察表としてまとめた。ここで観察表の見方について若干触れておく。(1)番号は遺構出土土器の拓影図番号がすべて通し番号となっており、その番号と一致する。また土器実測図に関しては活字をゴチック体に変えた。なお、グリッド出土土器の拓影図は遺構出土土器の拓影図とは別に通し番号が打ってあるので照合の際には注意されたい。(2)分類の項には当報告書で便宜上分けた記号が記入されている。なお、分類は最も多量の土器がまとまって出土した4Cグリッドにおいて基礎的作業を実施しており、分類基準は4Cグリッド出土土器を参照のこと。このことは他グリッドに関してもあてはまる。(3)器形・文様の特徴は、勿論施文工程等の諸特徴も含めて考えている。(4)胎土・焼成・色調等に関しては、主として土器製作技術面での観察事項が記載されている。(5)備考には、その他の特記事項、たとえば出土状態等が記入される。

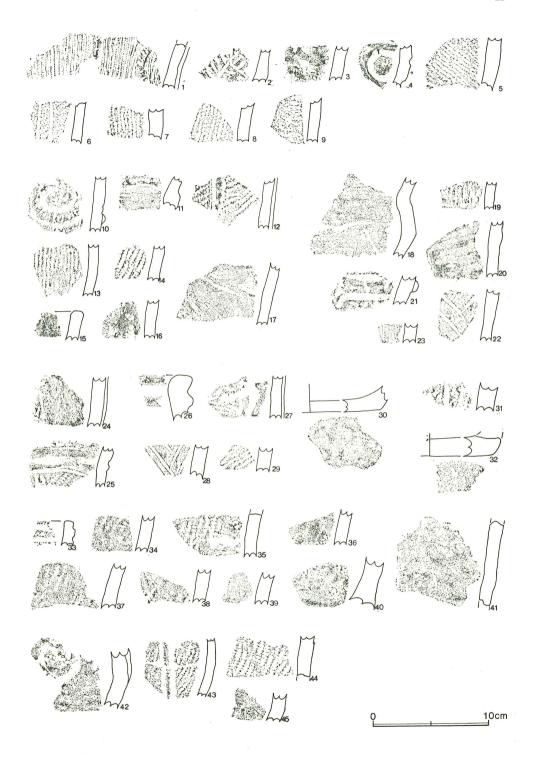
遺構出土土器観察一覧

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
1	Шd	深鉢の胴部破片であるが器形の詳細は不明。 地文には半截竹管による条線が縦位に施される。竹管の幅は約0.5 cm。地文施文後、刻みを持つ隆帯が添付される。この土器を特徴づけるモチーフが展開するのであろうが、不詳。この隆帯には両側面をなぞるように、地文と同じ施文具による平行沈線が引かれている。		1号住居跡覆土
2	IX	深鉢の胴部破片。竹箆による幾何学文様がわずかに観察されるのみ。	胎土に赤、黒、白、灰等各種の小砂粒がやや多量に含まれているが中でも、片岩質の小礫は目立つ。 当地域の特徴となろう。焼成は良好。色調は内面が黒、外面が明赤褐色。	1 号住居跡覆 土
3	IX	深鉢の胴部破片。箆による刺突列が2条認められるのみ。	胎土には片岩質の小礫の他に赤、 白、灰、黒の小砂粒を多く含む。 焼成は良好。色調は内面が黒、外 面が明赤褐色。	1 号住居跡覆 土
4	IX	深鉢の胴上半部、恐らく口縁部に近い箇所の	胎土は上記3点と殆んど変わらな	1 号住居跡覆

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
		破片であろう。箆による円文が描かれている。	いが、砂粒はやや細かい傾向にある。焼成は良好。色調は内面暗赤 褐色で、外面赤褐色を呈する。	土
	IV a	深鉢の胴下半部破片。地文には2段の縄RL が縦方向に回転施文され、その上には箆による2条の垂線が描かれている。	胎土には小礫がやや多い。含有物 は上と同。焼成良好で堅緻。色調 は内面が明赤褐色で外面がにぶい 赤褐色を呈す。破片上部は輪積み 部分で剝離。	1号住居跡覆土
6 7 \$ 8	ХЬ	いずれも深鉢の胴部破片。地文としての撚糸 Lが5では斜、7~8ではほぼ縦に転がされ ているのが観察されるが、他の文様は不明。	胎土の含有物は上と同じで、若干 多めに含まれている。焼成良好。 色調は5が内面が褐灰色で外面が 明赤褐色、7~8は両者共に内面 が明褐灰色で外面が黒褐色。	1 号住居跡覆 土 7~8の外面 には炭化物の 付着が顕著
9		深鉢の胴部破片。地文には2段の縄RLが縦位に回転施文されている。	胎土の含有物は同じだが、砂粒は 大きめで多く、内面ではかなり目 立ってザラついている。焼成は良 好。色調は内面が淡橙色で外面が 灰褐色。	1 号住居跡覆 土
2	IV	口縁に4単位の小突起を配する深鉢形土器で若干内彎する口縁部は胴中央部で一端すぼまる器形を示す。以下は残存しておらず推測の域を出ないが、恐らく図示したように途中でわずかに脹らみながらも底部へ向けて収束するのであろう。地文には2段の縄RLが口縁部より一貫して縦位に回転施文されている。文様としてはこの地文上にS字の両端に渦を巻かせたようなモチーフが4箇所の小突起下に斜めに配され、これらの間には内部にされている。もっとも、実測図に示した正面部分の渦は他の3箇所の渦とは巻く方向が反対となっており、S字と言えないのだが、詳しくは展開模式図を参照のこと。また、胴中央にもS字状渦巻の片鱗が一部観察されるが不詳である。なお、沈線間の磨り消しは全然確認されない。口径は20cm。	胎土には比較的粗い赤、白、灰、 黒等の小礫を多く含み、現状での 手触は良くない。片岩質の小礫を 含む点も上と同じ。焼成は良好。 色調は内外面共に口辺部は明赤褐 色~赤褐色を示し、胴部は黒色味 を帯びている。	1号土壙 第31図2の展開模式図と同 欠損部は胴下 半と小突起部分 正位の状態で次の3と並んで出土
3	VII a	口縁部は内彎し、胴中央部でしぼるようにくびれる器形を呈する深鉢である。地文には燃糸上が全面に縦に転がされている。文様は口縁部と胴部に3本の沈線が横位にめぐらされその間には同じく3本単位の連弧状の沈線文様が8単位でめぐらされている。この連弧文は上部で区画され、下端には3本の垂線が付	胎土に、最大は 0.5 cmの小礫を含む。全体的に、白、灰、灰黒色の小礫を多く含み、器面の荒れた部分ではザラザラとした質感がある。焼成良好。色調は、内外面共に胴上部は赤味をおびた茶褐色を呈し、くびれ部付近は内外面共に	

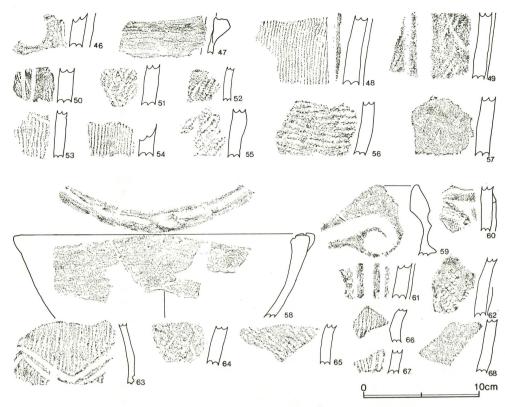
番号	分類	器 形 ・ 文 様 の 特 徴	胎土・焼成・色調等	備考
		加されている。ところで、沈線はすべてが幅 0.6 cmの半截竹管によって描かれている。また、磨り消しの兆候は全く認められず、ただ、沈線を引く際に竹管の内側で部分部に磨り消された部分が発見されたに止まった。口径は20.5 cm。	黒変している。	土 口唇部内側に 弱いとは言え 稜を有するの は特徴的。
10	IX	深鉢の胴上半部破片であろう。箆による沈線 文様と隆帯による渦文が見られる。隆帯上に は箆による刻みがのっている。		2号土壙
11	П	深鉢の口縁部付近の破片。恐らくキャリパー 状口縁の下端部破片であろう。文様は不明。	胎土、焼成共に上と同。色調は内 面がにぶい橙色で、外面が明赤褐 色を呈する。	2号土壙
12	ШЪ	深鉢の胴部破片。地文は2段の縄RLが縦位に回転施文されている。地文上には蛇行隆帯が同じく縦位に貼り付けられ、隆帯の両側縁には箆によるなぞりが加えられている。隆帯の断面は三角形を呈する。	胎土には小礫から粗砂まで、赤、 白、灰、黒等各種を混入する。焼 成は良好で堅緻。色調は内面がに ぶい橙色で、外面は灰褐色。	2号土壙
13	Хb	深鉢の胴部破片。地文としての撚糸Lが縦位 に転がされている。	胎土、焼成共に同上。色調は内面 が黒色、外面が明赤褐色。	2号土壙
14	Ха	深鉢の胴部破片。地文には2段の縄RLが大略縦位に回転施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 明褐灰色、外面がにぶい橙色。	2号土壙
15 \$ 17	VI	いずれも無文の深鉢の破片。15のみ口縁部で 他は胴部。	胎土は17がやや礫の含有が少ないが、15~16は同上。焼成は15が最も良好で堅緻、16~17は普通。色調はいずれも外面はにぶい橙色を呈するが、内面は15、17が黒褐色で16が淡橙色。	2号土壙
18	ХIb	浅鉢の胴腹部付近の破片であろう。無文。	胎土の小礫含有量は若干少ない。 焼成は良好。色調は内外面共にに ぶい赤褐色を呈するが、内面は黒 変している部分もある。 腹部最大径より下は箆による削り が左→右に施されており、その後 の磨き等はなく、砂粒の移動痕が 顕著である。従って胴腹部には水 平に稜ができている。	5号土壙
19	Хс	深鉢の胴部破片。文様としては箆による縦沈 線が数本観察されるのみ。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共に明赤褐色。	5号土壙
20	VI	深鉢の胴上部破片と思われるが、全くの無文	胎土、焼成は同上。色調は内面が	5号土壙

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土·焼成·色調等	備考
		で不詳。外面には輪積み痕、整形痕等が粗雑 に残されている。	褐灰色で、外面が暗赤褐色。	
21	П	キャリパー状口縁を有する深鉢の口縁部破片で、隆帯区画の一部が見受けられる。隆帯に は太めの箆による沈線が添えられている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 橙色で、外面が黒色を呈す。	6 号土壙
22	Ше	深鉢の胴部破片。沈線による斜線が認められるが、恐らく矢羽状に構成されている文様の部分であろう。地文は無し。		6号土壙
23	Хb	深鉢の胴部破片で、地文の撚糸Lが観察されるのみ。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共に灰褐色。	6号土壙
24	Шb	深鉢の胴部破片。文様は表面がかなり剥落しており不明瞭だが、地文には2段の縄RLが縦に転がされているらしい。縄文地上には1本の隆帯が垂下されている。隆帯には沈線が添えられている。		7号土壙
25	IV a	深鉢の胴部破片。キャリパー状口縁から、円筒状の胴部へと移行する部分であろう。口縁部と胴部の文様帯を区画する横位の3本の沈線と胴部に3本1単位で垂下する沈線がわずかに観察される。垂線は半截竹管を使用。地文には2段の縄RLが縦に回転施文されている。	は若干多い。焼成は良好。色調は	8号土壙
26	II	キャリパー状口縁を有する深鉢の口縁部破片 だが、小破片の為、文様の詳細は不明。	胎土、焼成は同上。色調は内外面 共に褐灰色。	10号土壙
27	Шс	深鉢の胴部破片。地文には1段の縄Lが縦に 転がされ、その上には隆帯が主たる文様とし て配されている。詳細は不明。		10号土壙
28	Ше	深鉢の胴部破片。器面には矢羽状の沈線が縦 に描かれている。地文は無し。	胎土、焼成は同上。色調は内外面 共に淡橙色。	10号土壙
29	Ха	深鉢の胴部破片で、器面には2段の縄RLが 縦位回転されるのが観察されるのみ。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 褐灰色で外面がにぶい赤褐色。	10号土壙
30	XII	深鉢の底部破片である。文様等は観察されない。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 黒色、外面がにぶい橙色を呈す。	10号土壙
31	IVa	深鉢の胴部破片。 2段の縄RLが地文として 縦位に回転施文され、その上には箆による沈 線が2本垂下されている。沈線間は磨り消さ		13号土壙



第9図 第1号住居跡(1~9)、第2号土壙(10~17)、第5号土壙(18~20)、第6号土壙(21~23)、 第7号土壙(24)、第8号土壙(25)、第10号土壙(26~30)、第13号土壙(31~32)、第14号土壙 (33~41)、第15号土壙(42~45) 出土土器拓影図

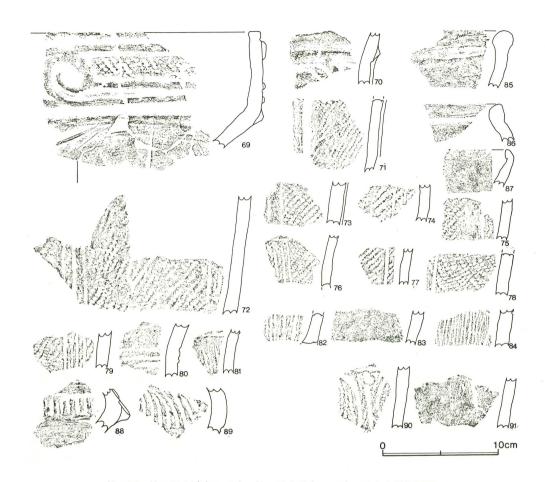
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
留与	刀规			加与
32	XII	れない。 深鉢の底部破片。	っている。 胎土、焼成は同上。色調は内外面 共ににぶい橙色。 底部の円板部分が剝離したもの。	13号土壙
33	VII	深鉢の口縁部破片。口唇直下に2本の沈線が 横位にめぐらされているのが観察されるが不 詳。恐らく連弧文土器の部分破片であろう。	胎土、焼成共に同上。色調は内面 が暗赤褐色で外面が黒色。	14号土壙 口唇内側に弱 い稜がある。
34 \$ 38	Ха	いずれも深鉢の胴部破片であり、地文に縄文 が施されている。縄文は2段の縄RLが縦に 回転されたもの。	胎土、焼成は同上。色調はいずれ も内外面がにぶい赤箆色を示す。	14号土壙
40	ХIIb	深鉢の底部直上の破片である。地文には撚糸 Lが縦に回転施文されている。	胎土、焼成は同上で良。色調は内 外面共ににぶい赤褐色を呈する。	14号土壙
39 • 41	VI	深鉢の胴部破片であり、無文。39は底部に近い部分の破片であるが、41はあるいは浅鉢の破片かとも考えられるが不明瞭である。	胎土、焼成共に同上で良好。とり わけ41は堅緻に仕上げられている。 色調は39が内外面共ににぶい橙色 で、41が内外面共に明赤褐色を呈 する。	14号土壙
42	П	キャリパー状口縁を有する深鉢の口縁部破片である。隆帯による渦の部分が観察される。 地文等は不明。	胎土には大粒の礫が目立って含まれるが、焼成は良好。色調は内外 面共に明赤褐色を呈するが、外面 には煤の付着により黒変した部分 も認められる。	15号土壙
43	IVa	深鉢の胴部破片。地文には2段の縄RLがほぼ縦位に回転施文されている。その上には半截竹管による一対の沈線が垂下されている。	胎土は他の土器と顕著な相違はないが、全体的に脆い器面を呈している。色調は内面が赤褐色で外面が灰褐色を呈する。	15号土壙
44	Ха	深鉢の胴部破片。2段の縄RLが斜位に回転 施文されている。	胎土には極めて多量の小礫を混入 している。焼成は良好。色調は内 外面共に明赤灰色。 輪積み部分での剝離資料である。	15号土壙
45	VI	深鉢の胴部破片。無文で、横方向の整形痕が 観察されるのみ。	胎土、焼成は普通。色調は内面が 黒色で外面が赤褐色。	15号土壙
46 47	П	キャリパー状口縁を有する深鉢の口縁部破片である。46は丁度、渦を巻く部分にあたる。 隆帯上には円形竹管の刺突列が見られる。47 は口縁部文様帯の下端で文様帯を画する隆帯が観察される。両者ともに地文は不明。	胎土、焼成は同上。色調は46が内 外面共に赤橙色で、47の外面は橙 色を呈する。	17号土壙



第10回 第17号土壙(46~57)、第18号土壙(58~68) 出土土器拓影図

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土·色成·色調等	備考
48	Шс	深鉢の胴部破片。地文には撚糸Lが縦位に回 転施文されている。垂下される隆帯には沈線 が添えられる。隆帯断面はほば台形である。	橙色で、外面が赤褐色。	17号土壙
49	Шb	深鉢の胴部破片。地文は2段の縄RLが縦に回転施文されている。隆帯は2本一対で垂下され、隆帯間の磨り消しは施されない。また隆帯に沿う沈線も認められない。隆帯断面はカマボコ状に近い。	胎土の砂粒多い。焼成良好。色調 は内面が黒色で、外面が橙色に近 い明赤褐色。	17号土壙 土器内面への 炭化物の付着 が顕著
50	IV b	深鉢の胴部破片。撚糸Lを地文とした上に箆 による沈線が垂下されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 明褐灰色、外面がにぶい橙色。	17号土壙
53	VII a	深鉢の胴部破片。おそらく連孤文土器の一部分である。地文には撚糸Lが縦に回転施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 暗赤褐色で、外面が明赤褐色。	17号土壙
51 \$ 52	Ха	深鉢の胴部破片。縄文のみの土器を一括した。 いずれも2段の縄RLが52を除いて縦方向に		17号土壙

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土·焼成·色調等	備考
55 \$ 56		転がされている。52は斜め方向への回転施文 である。	すべて灰赤色~にぶい橙色を呈している。	
54	Хb	深鉢の胴部破片。撚糸Lが縦位に回転施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 極暗赤褐色で、外面が赤灰色。	17号土壙
57	XI b	無文の破片で詳らかではないが、おそらく浅 鉢の一部であろう。	胎土には若干大きめの小礫を含む が、堅緻に焼き上げられている。 色調は内面が黒色、外面が灰赤色 を示す。	17号土壙
58	VI	小波状を呈する深鉢の口縁部破片であり、無文。口唇上には1本の箆による沈線が引かれ小波状部でその先端が若干巻かれる。	胎土に赤、白、灰、黒色等の砂粒 を混入する点は同上。焼成も良好 で堅緻。色調は内面が暗赤灰色、 外面が暗赤褐色。	
59	П	キャリパー状口縁を有する深鉢で、口縁部の 小突起下破片。粘土を貼り付け肥厚した部分 に幅広の太い沈線で渦が巻かれる。地文は不 明。	胎土、焼成は同上。色調は内外面 共、にぶい赤褐色。	18号土壙
60	Шс	深鉢の胴部破片。横位にめぐらされている隆 帯下に胴部文様帯が配される。その一部であ る蛇行隆帯の垂下が認められる。隆帯断面は カマボコ状。地文には撚糸Lが縦位に回転施 文されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 極暗赤橙色で、外面が暗赤褐色。	18号土壙
61 \$ 62	∭ b ∭ a	60と殆んど同じ部分の破片。61は2本一対の 隆帯が、62は1本(たぶん2本と思われる) の隆帯の垂下がみられる。どちらの隆帯も断 面カマボコ状を呈し、沈線が添えられている。 地文は61に2段の縄RL、62にLRが縦に回 転施文されている。	胎土、焼成は同上だが、61は二次 加熱を受け脆弱となっている。色 調は61が内外面共に橙色で、62は 内面が褐灰色、外面が炭化物の付 着で黒色を示す。	18号土壙
67	IV b	深鉢の胴部破片。地文上に半截竹管による平 行沈線が垂下されている。地文には撚糸Lが 縦に回転施文されている。		18号土壙
63	WIIa	深鉢の胴下半部の破片で、器形は第20図3と同じであろう。撚糸Lを地文とした上には箆による2条の連弧状文が配されている。	胎土、焼成は同上。内面の整形は 極めて良好。色調は内外面共に明 赤褐色を呈する。	18号土壙
64 \$ 66	Ха	深鉢の胴部破片で、縄文が施文されたものを 一括した。いずれも2段の縄RLが転がされ ている。	64の胎土が少し不良な他は焼成と 共に同上。いずれも内外面共に橙 色の色調を示す。	18号土壙
68	Хс	深鉢の胴部破片。器面には浅く細い集合条線 が満遍無く縦に引かれている。	胎土、焼成は同上。色調は内外面 共に褐灰色。	18号土壙



第11図 第19号土壙(69~89)、第20号土壙(90~91) 出土土器拓影図

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
69	I	4 (第20図) と同じ。推定口径32cmを測るキャリパー状口縁の深鉢である。口縁部文様帯には隆帯による渦巻と枠状文を基調としたモチーフが単位文化して配される。地文の縄文には3段の縄RLRが横位に回転施文されている。頸部は無文帯。胴部は不明。なお、隆帯には沈線が添えられている。隆帯は扁平であり、立体感薄い。隆帯貼付は縄文施文後である。	胎土には赤、白、灰、黒色等の砂粒をやや多めに含む。焼成は良好で堅緻。色調は内面が赤褐色で、外面が暗赤褐色。 輪積みの粘土紐の幅は約3cmであることが断面から観察される。	19号土壙 3 段の縄は他 に 2 点検出さ れている。
70 5 71 • 73	III b	キャリパー状口縁を有すると思われる深鉢の 胴部破片であり、隆帯が垂下されているもの を一括した。隆帯は70、73が断面カマボコ形 で、71は断面三角である。いずれにも沈線が 添えられている。地文には、いずれも2段の	胎土、焼成は同上。色調は70が内 外面共に橙色で、71、73が内外面 共に灰赤色を呈する。	19号土壙

番号	分類	器 形 ・ 文 様 の 特 徴	胎土・焼成・色調等	備考
		縄RLが縦位に回転施文されている。なお、 70は69同様頸部無文帯を持つ。		
72 74 5 78 80	IV a	深鉢の胴部破片であり、箆による沈線が垂下されているものを一括した。2本ないし3本が一般的である。沈線間の幅は狭く、意識的な磨り消しが施されたと判断される資料はない。いずれも地文には2段の縄RLが縦方向に回転施文されている。	胎土、焼成は同上で一般的。色調は73が内外面共に明褐灰色、76の外面が黒褐色の他は、ほぼ明赤褐色である。77は内面が黒色で、外面がにぶい橙色を呈している。	19号土壙
79 • 81	IV a	深鉢の胴部破片で、文様モチーフその他は殆んど前類と同じだが、沈線が半截竹管によるという点で他と区別される。やはり、沈線間への意識的な磨り消しは加えられていない。	胎土、焼成は同上、色調は79が内面が灰褐色で、外面が明赤褐色、81は内面が赤褐色で、外面がにぶい赤褐色を呈する。	19号土壙
82	IV b	撚糸Lを地文とした土器で、深鉢の底部直上部分の破片である。 箆による2本の沈線が垂下されている。	胎土、焼成は同上。色調は内外面 共ににぶい橙色を呈する。	19号土壙
84	VII a	深鉢の胴部破片。連弧文土器である。地文に は撚糸Lが縦位に施文されている。	胎土、焼成は一般的。色調は内外 面共に灰褐色を呈する。	19号土壙
83	Ха	深鉢の胴部破片。地文には2段の縄RLが縦位に回転施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 灰褐色で、外面がにぶい橙色。	19号土壙
85 \$ 87	VI	深鉢の口縁部破片で文様等が認められない。 85は肥厚しながら若干内彎する口縁形態を示し、口唇内側には稜を形成している。86は内 彎した口縁部が口唇部に到り外折ぎみに直立 する口縁形態を示す。87は口唇部が逆「く」 の字状に内折する形態を示す。	胎土、焼成は同上で一般的。色調は87の内面が灰褐色をしている他はほぼにぶい赤褐色を呈している。	19号土壙 85の口縁裏に 丹塗りの痕跡 が残されてい る。
88	ХIа	浅鉢の胴部中央の屈曲部分の破片。屈曲上部 には竹管状工具によると思われる短沈線が縦 に引かれている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 暗赤褐色、外面が灰赤色を示す。	19号土壙
89	VIII	内彎する口縁部を有する深鉢の口縁部破片。 文様は箆による弧線が連続的に描かれ、文様 帯を充たしている。拓図下端には口縁部文様 帯を区画する横の沈線も見られる。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 赤灰色で、外面が赤黒色を示す。	19号土壙 重弧文土器
90	IX	深鉢の胴部破片。箆による沈線文様が描かれているが、モチーフ等は不詳。地文には2段の縄RLが斜位に回転施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 暗赤灰~淡橙色で、外面が赤灰色 を呈する。	20号土壙
91	VI	深鉢の胴部破片と思われる。無文。	胎土の砂粒は若干多いが、含有物 は同上。焼成良好。色調は内面が にぶい褐色、外面が明赤褐色。	20号土壙

b. 石 器

出土した石器は全て図化した。土器同様に極めて貧弱である。最も多く検出された打製石斧です ら19点と少ない。遺構出土のものはわずか 5 点である。

さて、個別の説明に入る前に、あらかじめ打製石斧に関しては分類基準を明確に示しておきたい。

- T類 両側縁がほぼ平行になるもの
 - I-a 抉りを持たないもの
 - I-b 浅い抉りを持つもの
- Ⅱ類 頭部幅の方が狭く、刃部に向かって直線的に開くもの
 - Ⅱ-a 幅狭で全長が長く、頭部が尖り、縦長の二等辺三角形状を呈するもの
 - Ⅱ-b 前類とほぼ同じだが段のつくもの
 - Ⅱ一c 幅広で全長が短かく、頭部が尖り、二等辺三角形状を呈し、小形のもの
 - Ⅱ-d 幅広で全長が短かく、頭部の尖らないもの
- Ⅲ類 ほぼ胴部中央に抉り込みを持つもの
 - Ⅲ一a 大きく深い抉り込みを持つもの
 - Ⅲ一b小さく浅い抉り込みを持つもの
- 以上の分類基準はグリッド出土の場合にも当てはまるので後章では繰り返さない。

第1号住居跡(第23図1~3、第27図22)

- 1. 打製石斧(I-a) 刃部の欠損した資料である。両側縁はほぼ平行し、頭部近くには自然面が残されている。敲打ないし磨滅痕は、左側縁ではやや上、右側縁では下によった部分に認められる。剝離を加える基本的な順位は両面とも上 \rightarrow 下へという方向性をとる。
- 2. 打製石斧(Π — α) 上部幅が狭く縦長の形態をとる。刃部は弧状をなすが、幅 は あ ま り な い。片面には大きな剝離が加えられておらず、自然面が多く残る。刃部は鋭く「V」字状を示す。 側縁に関しても同様である。磨滅痕等は殆んど観察されないが、刃部の鋭さが保たれている事実と 関連があるのだろう。剝離の順位は上 \rightarrow 下を基本としている。
- 3. 打製石斧($\Pi-a$) 刃部を含む下半分が欠損している。片面には大きな剝離は全く加えられず自然面を残す。側縁には細かな刃潰し状の連続剝離が加えられる。剝離の基本順位は上 \rightarrow 下となっている。
- 22. 石鏃 先端部を欠損するが、ほぼ二等辺三角形を呈する。丹念な押圧剝離が加えられているが、やや分厚い。本遺跡で唯一の出土資料である。

第13号土壙 (第23図 4、第27図23)

- 4. 打製石斧(II-d) 頭部の幅は狭く、刃部に向かうにつれて両側縁は開き、刃部は弧状を呈する。片面に自然面が残される。刃部は潰れており鈍い。剝離は上 \rightarrow 下、左 \rightarrow 右という基本的な方向性が認められる。
 - 23. 剝片 黒耀石製であり、透明度は比較的良好。下端部は折損している。

第14号土壙 (第23図5)

5. 打製石斧(II-b) 頭部の幅が狭く、刃部に向かって開く。途中に段が作出されている点は注目される。段の部分の磨滅は激しい。柄擦によるものであろうか。刃部には磨滅があり鋭さはない。片面には自然面が残される。剝離順位は大凡上 \rightarrow 下である。

第15号土壙(第23図6、第24図7、第27図24)

- 6. 礫石 非常に分厚く、重量感のある石器で、主要な剝離は正面から裏面へ向けて加えられている。使用痕らしき磨減痕は裏面の左側縁にのみ認められる。
- 7. 敲石 20cmを越える比較的扁平で大きな石を使用している。裏面は若干くぼんでいる。敲打部はやや幅広で厚みのある下端を中心に側面の中央部近くまで認められる。
 - 24. 石核 上端から下方へ向かう数条の剝離痕が認められる。

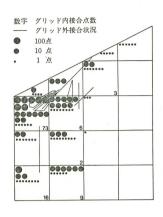
第19号土壙 (第24図8.9)

- 8. 打製石斧(I−a) 左右の両縁はほぼ平行するが、右側縁には自然面が帯状に残されている。磨滅痕は刃部直上の両側縁部に観察される。成形の際の剝離は裏面右側縁が下→上で、他の部分に関しては上→下を基本順位としている。横断面は台形状を呈する。
- 9. 剝片 加撃は剝片裏面の観察から右斜め上方より加えられたことが明らかである。断面は三角形を呈し、一部に自然面を残す。

(松村和男)

3. グリッド出土遺物

遺構の検出状況からも推察されたように、下南原集落の主体は、今回の発掘区を限界に西方に広がっていることは誤りない事実と思われる。そのことは遺構を無視した形での遺物の出土量の多寡からも裏付けられる。すなわち、遺物は発掘区の西方に向かうにつれて出土量が激増するのである。中でも4C区を中心とする箇所は夥だしい程の出土量を示し群を抜く。出土遺物の時期も纒まっている点、大形破片が目立つ点、同一グリッド内での接合資料が多い点などから、あるいは住居跡が存在しているのではないかとの疑いも持たれたが、その証跡を検出することができず不分明に終わった。いずれにしろ、集落の中心部が近いことを思わせる一事であろう。



第12図 遺物の検出状況

a. 土 器

土器についての説明は、以下のごとく観察表によった。観察表の見方は遺構出土土器に準ずる。 グリッド出土土器観察一覧

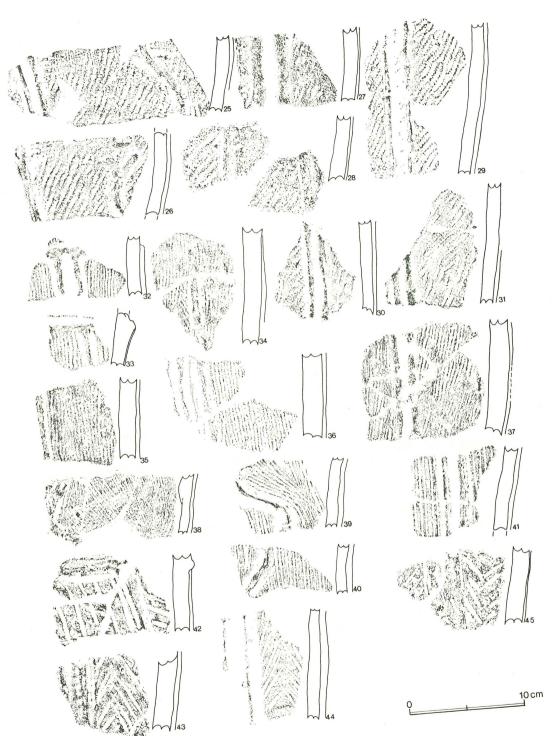
	13 WT	77	11/ 1 Ide 15 4 777 46	111
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
1	I	キャリパー状口縁を有する深鉢で、口縁部文様帯の下に頸部無文帯を配する。無文帯部分には縦の箆整形が施されている。口縁部文様帯には隆帯による渦と枠状文が交互に配されるのが一般的なようであるが、当資料は、渦の部分が剝落しており不明となっている。隆帯には沈線が添えられている。枠内には2段の縄RLが横位に回転施文されている。キャリパーの内彎度はあまり強くない。なお、施文順位は<縄文施文→隆帯貼り付け→沈線>である。	胎土には最大が 0.6 cmの小礫をは じめ、赤、白、灰、黒色等各種の 砂粒を混入する。片岩質の砂粒の 含有は少ない。焼成は良好で極め て堅緻。色調は内面がにぶい赤褐 色を基調とし一部、暗赤灰色の部 分を有し、外面は赤褐色を呈す る。	4 C グリッド
2 \$ 6	Ша	キャリパー状口縁を有する深鉢の口縁部破片であり、口頸部に無文帯を持たないで、口縁部文様帯の渦巻文間の枠状文内が縄文で埋められているものを一括した。縄文は4が2段の縄LRで、他はRLであり、ほぼ横位の回転施文による。だが、2は縦位回転の資料であり注意されよう。全体的に隆帯は扁平化の傾向にあり、キャリパー部の内彎度は弱い。ところで施文順位については2が隆帯部分の見事に剝離した資料であり、それによると<縄	2の胎土には白、灰、赤、黒色等の砂粒がかなり認められ、片岩質の砂粒も含まれている。他の土器片も殆んどこれに準じている。焼成はいずれも良好で堅緻。色調は表裏面共にいずれも灰褐色を基調にしているが、4、6の外面は黒褐色を呈している。	4 C グリッド 2 は口唇上に も沈線が引か れている。 2 は隆帯部分 の剝離資料

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
		文施文→隆帯貼り付け→沈線→胴部の撚糸施 文>となることが明瞭に観察される。		
5	II b	同じく、口頸部無文帯を有しないキャリパー形の深鉢形土器である。キャリパー部の内彎度は弱くほぼ垂直に立ちあがる。地文には、 撚糸Rが縦位に施文される。隆帯は比較的扁平で、それは渦巻文についても当てはまる。 従って、渦巻は粘土紐が巻いているというよりも太い沈線によって渦巻きが形成されているとさえ言える。渦巻文下には横位の隆帯上に3ケの刺突と、さらに口頸部には2本の箆沈線による扁平な渦が横に配される。胴部の2本一対の懸垂文は同部分からはじまる。8単位構成。施文順位は<撚糸施文→隆帯貼り付け→沈線〉。推定口径は44cm。	等の砂粒を若干多めに含む点も同様である。焼成は良好で堅緻。色調は内外面共に橙~明赤褐色を呈しているが、口縁部と口頸部で色	4 C グリッド 破片による推 定復原
6	Пс	やはり、口頸部無文帯を持たないキャリパー状の深鉢形土器で、5 同様、地文にも撚糸を施文する。ただし、撚糸はLである。キャリパー部の内彎度も比較的弱い。以上のように基本的にはII b類と殆んど条件が類似するが、本類は、渦巻文が極めて隆起している点で他と決定的に異なる。そして、枠を形成する隆帯は渦巻文間に連弧状に配置される。つまり渦巻文を頂点とした隆帯による連弧状文が6単位で器面をめぐるように構成されているのである。以下の胴部文様帯には、渦巻下から1本の蛇行沈線が垂らされ、その間には3本の沈線による懸垂文が配される。施文順位は〈口縁部の横位撚糸→隆帯貼り付け→口縁部沈線(あるいは胴部の縦位撚糸→沈線)→胴部の縦位撚糸→胴部沈線〉と判断される。推	胎土には白、灰、黒、赤色等の砂粒が、若干多めに混入されている。 焼成は良好で堅緻。色調は内面が 灰褐色を呈し、外面が明黄褐色を 示す。	実測図は大形
1 7 5 15	II d	定口径は30cm。 キャリパー状の口縁を有し、口頸部無文帯を持たない点では前類と同じ。キャリパー部の内彎度も弱い。むしろ、殆んどキャリパー部の両半しており、渦巻文自体も沈線主導型となっている。口縁部文様帯の枠内には縄文が施されず、巾広の縦沈線を充填するのを特徴とする。胴部には1では2本の隆帯による懸垂文と1本の蛇行隆帯が交互に配されている。なお、文様同志の関連性及びその構成の仕方に関しては結語に詳しく触れてあるので省略する。一方、7の胴部には沈線による懸垂文が見られる。なお、1の口径は39cmを測る。	胎土、焼成は同上で一般的と言って良いであろう。ただ、1は小礫の含有がやや多く、7は若干少ないという個体差があるのみ。色調も、ほぼ明黄褐色から明褐色の間におさまる。1の外面と11、15の内面は黒褐色に近い色調を呈している。	4 C グリッド 1 の隆帯断面 はカマボコ状 を呈する。 1 の展開模式 図は第31図



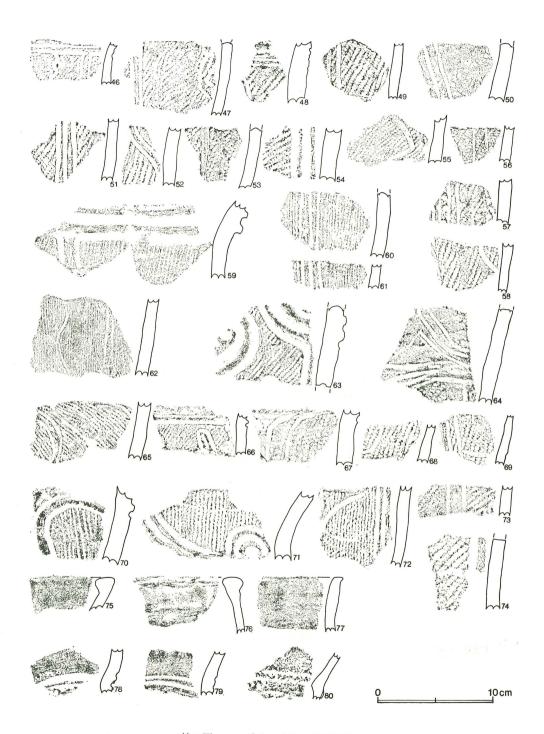
第13図 4 C グリッド出土土器拓影図

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
		施文順位は<□縁部隆帯・沈線→撚糸施文→ 隆帯による懸垂文→沈線の付加>である。		
16	II e	深鉢の胴部破片で誤りないと思うが、小破片 の為、全体の形は推定し難い。文様としては 指の押圧が加えられた隆帯と箆による沈線、 刺突列が見られる。	胎土、焼成は同上で堅緻に仕上げられている。色調は内外面共に暗 赤褐色を呈する。	4 C グリッド
17 \$ 20	П	キャリパー状口縁を有すると思われるが、小破片の為、判然としないものを一括。いずれ の渦巻も扁平化している。	胎土、焼成は同上。色調は17、18 が内面が淡橙色で外面が黒褐色、 20は内面が黒褐色で外面がにぶい 橙色、19が内外面共ににぶい橙色 を呈する。	4 C グリッド
21 \$ 22	Ⅲ a	深鉢の胴部破片で、21と22は同一個体。胴部と口縁部を区画する隆帯が3本横にめぐらされ、ある間隔をおいて隆帯が懸垂される。隆帯断面はカマボコ状で沈線が添えられている。地文には2段の縄LRが縦に回転施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 褐灰色で、外面が明赤褐色を呈す る。 21は破片上部が輪積み部分で剝離 したもの。	4 C グリッド
23 \$ 31	Шb	深鉢の胴部破片であり、基本的には前類と殆んど同じで隆帯による懸垂文が施されているものを一括した。ただし、地文はすべてが、2段の縄RLの縦位回転によっているものである。25、26は同一個体であるが、縄文の他に集合条線の施文も認められる。隆帯断面は全てがカマボコ状で、28以外にはせいぜいなそり程度で沈線は添えられていない。隆帯間も意識的に磨り消した痕跡は窺えない。29は隆帯間に地文が明瞭に観察される好資料である。	胎土、焼成はほぼ同上と言えるが、 28は遺存状況にもよろうが、極め て脆弱な資料である。色調は内面 については30の黒色を除き、ほぼ にぶい赤褐色を基調とし、外面は 暗赤褐色〜黒褐色を呈している。 26は破片の上下とも輪積み部分で 剝離した好資料である。	4 C グリッド
32 \$ 37	Шс	深鉢の胴部破片で隆帯が垂下するもの。本類は地文に撚糸が施文されているものを一括した。撚糸はいずれもしである。隆帯断面は全てがカマボコ状。隆帯に沈線が添えられたものは32のみで、他にはない。1の胴部は本類に属する。	胎土、焼成は前類と同じ。色調は32、33が内面が橙色で、外面がにぶい橙色、34~37が全般的に赤褐色を呈している。	4 C グリッド
38 \$ 41	∭ d	深鉢の胴部破片で隆帯が垂下するもの。本類には地文が集合条線であるものを一括した。41は半截竹管による沈線であり特異である。 隆帯断面は39、40が三角で、38、41がカマボコ状、いずれも沈線は添えられていない。なお、施文順位は<陸帯貼り付け→集合条線>であることが明瞭に観察される。	胎土、焼成は同上。色調は、38~40は内面が黒褐色で外面が褐灰色を呈し、41は内外面共ににぶい橙色を呈する。	4 C グリッド



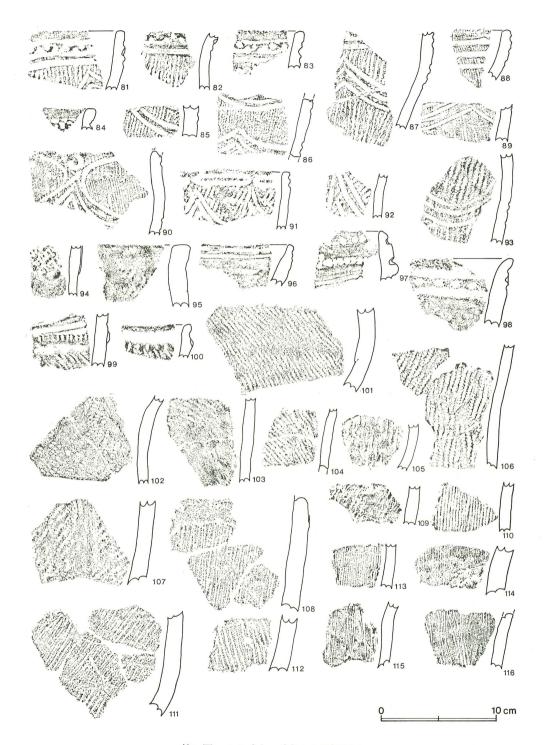
第14図 4 C グリッド出土土器拓影図

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
42 \$ 45	III e	深鉢の胴部破片で隆帯が垂下するものという点では前類と共通するが、地文に矢羽状の短沈線が施されているものを一括した。隆帯断面はほぼカマボコ状を呈するが、44はかなり高さのある断面形態を示している。また、44以外には沈線が添えられている。	胎土、焼成は同上。色調は42、43 が内外面共ににぶい橙色で、44が 灰褐色を示す。45は内面が黒色で 外面が明赤褐色を呈する。	4 C グリッド 45の内面には 炭化物が夥し く付着してい る。
46 \$ 58	IV a	深鉢の胴部破片である。胴部の懸垂文が隆帯ではなく、沈線によるものを一括した。地文には全てに2段の縄RLが縦位に回転施文されている。沈線は箆によるものが一般的なようであるが、48、52、53のように半截竹管を使用するものもあり注意される。沈線間への磨り消しは実施されない。沈線の幅は狭いのが一般的。	胎土、焼成は同上。色調は46が他 と異なり明赤褐色を呈すが、全体 的ににぶい赤褐色を呈している。 内面が黒色を示すものは51と55の 2点ある。 47、50、53は輪積み部分での剝離 資料。	4 C グリッド
59	IV b	深鉢の胴部破片。沈線によって懸垂文が施される点は前類と同じだが、地文に撚糸が施されるものを一括。5、6の胴部は本類に当てはまる。59の撚糸はRである。	胎土、焼成は同上。色調は内面に はにぶい橙色の地に、斑に赤橙色 の部分が見られ、外面は明赤褐色 を呈する。	4 C グリッド
60 \$ 62	IV c	深鉢の胴部破片。地文に集合条線が縦に配された一群。62の蛇行沈線は半截竹管によるが、他例は箆による。	胎土、焼成は同上で一般的。色調はにぶい赤褐色を呈しているが、 62の内面は黒色である。 60は輪積み部分での剝離資料。	4 C グリッド
63 64 66 66 69	IV d	同じく深鉢の胴部破片であるが、単に懸垂文、蛇行沈線のみではなく、詳細は不明だが、ある曲線的なモチーフが施されているものを一括した。各種のバラエティーがあるようであるが、個別の説明は略す。地文には2段の縄RLが縦位に回転施文されている。	胎土, 焼成は同上。色調は67が内面が灰褐色で、外面が黒褐色を呈する。他は全体的に明赤褐色を示している。63、64は輪積み部分での剝離資料。	4 C グリッド
65 70 5 72	IV e	深鉢の胴部破片。前類と同じ理由で分類項を与えた。地文には撚糸が縦走する。65のみ斜走。撚りは65、71、72がLで、70がRである。		4 C グリッド
73 \$ 74	V	深鉢の胴部破片。箆沈線による懸垂文が配される点、地文に総位回転の縄文が施される点などIV a 類と区別する根拠はないが、沈線間に意識的な磨り消しが加えられる点でその相違点は決定的となる。73には 2 段の縄 R L 、74には 3 段の縄 R L R が施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は、73が 内面が明褐灰色で、外面が明赤褐 色で、74は内面が明赤褐色で、外 面が明褐灰色を呈する。	4 C グリッド
75 \$ 80	VI	深鉢で、口縁部が無文のものを一括した。75、78~80は頸部で屈曲する器形を示す。75の口唇部内側は肥厚し、稜が形成される。76は内彎ぎみで口唇部が肥厚し、77は外反する。	胎土、焼成は同上。色調は、77が 内外面共に赤褐色を示す他は殆ん ど灰褐色を基調とする。	4 C グリッド



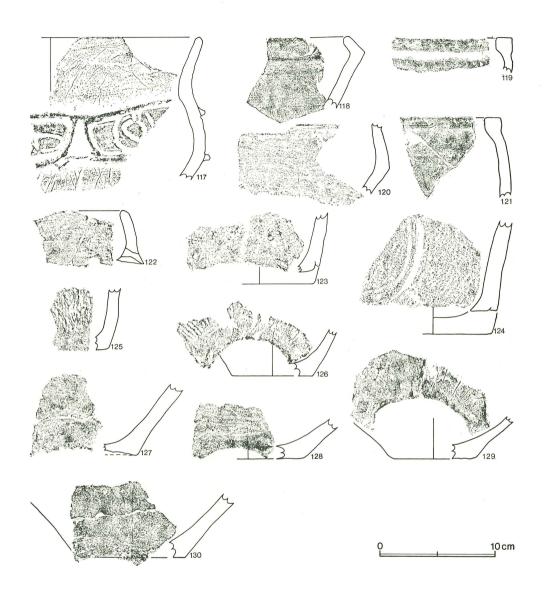
第15図 4 Cグリッド出土土器拓影図

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
81 \$ 87	VII a	深鉢の破片。器形は大略 3 に準ずる。文様としては連弧文が施され、地文に撚糸が縦走するものを一括した。恐らく、81、83、84、87は同一個体と思われる。口縁部に 3 本の箆沈線がめぐらされ、上の 2 本間には交互刺突が配される。以下には同じく箆による 3 本単位の連弧文が配される。沈線間には意識的な磨り消しは加えられない。地文の撚系は全てがしてある。施文順位は<撚糸施文→沈線〉であることが明瞭。	胎土の含有物の種類は当遺跡では 一般的だが、砂粒は細かく、含まれる量も少ないようだ。色調は、 81、83、84、87が内外面共に明赤 褐色で、82が内面が明赤褐色で、 外面が黒色、85、86は内外面共に 明褐灰色を呈する。 86は輪積み部分での約離資料。	4 C グリッド
88 \$ 90	VIIb	連弧文を有する深鉢で、地文が集合条線のものを一括。箆による3本沈線が施文の基本単位をなしている。沈線間は磨り消されない。90は連弧文が枠状に閉じるように構成されている類で、連接部には逆「の」の字文が配されている。	胎土、焼成は同上。色調は、部分的に煤の付着で黒変したものもあるが、ほぼ明褐灰色を呈する。 90は輪積み部分での剝離資料。	4 C グリッド
91 \$ 93	VIIc	地文に縄文が施された連孤文土器である。91 は口唇下に沈線による横長の枠状文が配され それと相連動するように3本の沈線による連 弧文が同単位でめぐらされている。地文は2 段の縄RLで口唇下から即、縦位に回転施文 されている。92、93は胴部破片で地文はやは りRLである。		4 C グリッド
94	VIII	口頸部付近の破片であり、格子目(籠目)文のある資料である。半截竹管による斜行沈線文が集合化して施文された上に、それと交差するように細い粘土紐が貼り付けられている。従って、仕上がりは格子目(籠目)状を呈する。格子目文の下端には1本の粘土紐が波状に貼り付けられている。それ以下は、当破片の範囲内では無文。	を多めに含有する。焼成は良好だ	4 C グリッド
95 \$ 100	IX	上記までで分類不能な深鉢を一括した。95は縄文のみ、96は沈線と縄文、97、98は沈線と刺突、99は刻みを有した隆帯がめぐる。100は凹線がめぐるといったように分類基準が統一しがたいので便宜上このように取りまとめた。なお、100はより新しい段階の資料である。	胎土、焼成は当遺跡では一般的であり、特記する点はない。色調もほぼ一般的でにぶい赤褐色を呈するものが主体を占める。100は内外面共に黒褐色を示す。	4 C グリッド 100は加曽利 E Ⅲ式土器
101 \$ 107	Ха	縄文のみが施文されている深鉢の胴部破片。 全てが2段の縄RLで縦回転を基本とする。 101は横回転による僅少例。	胎土、焼成は同上。色調は褐灰色 ~にぶい赤褐色の中にすべてがお さまる。	4 C グリッド
108	Хb	燃糸のみが施文されている深鉢の胴部破片。	胎土,焼成は同上。色調は褐灰色	4 C グリッド



第16図 4 C グリッド出土土器拓影図

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
112		撚糸は109がrで、108、112がL、110、 111がRである。	〜にぶい赤褐色の範囲内におさまる。 108は輪積み部での剝離資料。	
113 \$ 116	Хс	集合条線のみが施文されている深鉢の胴部破 片。	胎土、焼成は同上。色調はほぼに ぶい赤褐色を呈するが、113、115、 116の外面は黒褐色を呈する。	4 C グリッド
117	ХIа	浅鉢の破片であろう。 9 はこれを復原実測したもの。推定口径は26cmを測る。文様は、隆帯の貼り付けによる枠内に沈線文様が配されているようであるが不詳。なお、胴下半には剝がれた痕跡が認められる。	胎土には、片岩、石英、長石、チャート、黒雲母その他の小砂粒が若干多く混入されているが、とりたてて特記される事項でもない。 焼成も良好。色調は、内面が灰褐色で、外面がにぶい橙色を呈す。	4 C グリッド
118 \$ 121	XI b	浅鉢である。120は117と類似する器形となるのであろう。118は逆「く」の字を呈する口縁部からそのまま底部へと移行すると思われる。119、121は角張り、直立した口唇部から底部へと彎曲しながら移行する器形を呈すると思われる。	胎土、焼成は同上。色調は褐灰色 〜にぶい赤褐色の範疇におさまる が、118、120の内面は黒色を呈 する。	4 C グリッド
122	ХІс	器形は不明瞭であるが、あるいは有孔鍔付土 器かも知れない。口縁は波状部を有し、有孔 が1箇所と鍔状にせり出す部分の基部が認め られる。	胎土の含有物は同上であるが、砂 粒は細かい。焼成は良好で堅緻。 色調は内外面共に暗赤褐色~赤褐 色を呈する。	4 C グリッド
7 8 123 5 124	XII a	深鉢の底部。いずれも2段の縄RLが縦位に 回転施文されている。また、7、8には半截 竹管による懸垂文と蛇行沈線の施文が見られ る。124も半截竹管による平行沈線文がある。	胎土、焼成は同上。色調は、8が 内外面共に黒褐色を呈し、7、123 が内面が暗赤褐色で、外面がにぶ い赤褐色、124が内外面共ににぶ い赤褐色を呈する。 123、124は底部の円板との接合 部分で剝離した資料。	4 C グリッド
125 \$ 126	ХII b	深鉢の底部。どちらも地文に撚糸Lの縦走が 見られる。	胎土、焼成は同上。色調は両者共 に赤褐色を呈する。	4 C グリッド
127 \$ 130	XIII	浅鉢の底部。文様は全く認められない。	胎土、焼成は同上。色調はにぶい 橙色~褐灰色だが、127、128、 130の内面は黒色を呈する。	4 C グリッド
131	VII b	連弧文土器の胴部破片である。地文は集合条 線。	胎土、焼成は同上。色調は内外面 共ににぶい橙色。	1 E グリッド
132	XIII	浅鉢の底部と思われるが断定できない。無文である。箆の整形痕が多く残されている。	胎土、焼成は同上。色調は内外面 共に明赤褐色。	2 Dグリッド



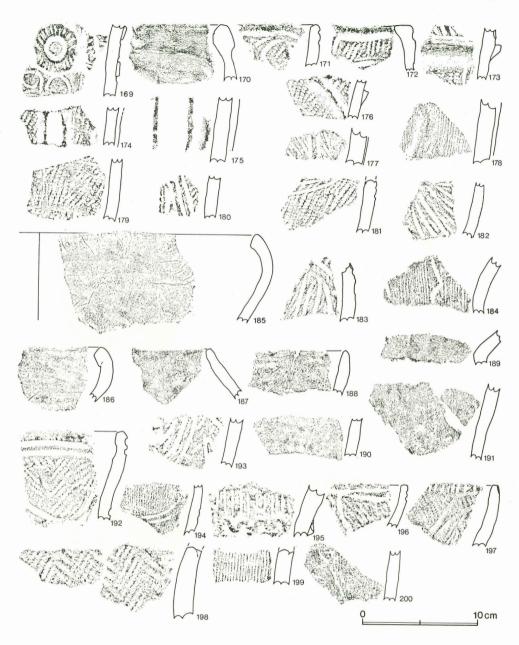
第17図 4 Cグリッド出土土器拓影図

番号	分類	器 形 ・ 文 様 の 特 徴	胎土・焼成・色調等	備考
133	Ше	矢羽根状沈線を地文とする深鉢の胴部破片で あり、当資料は蛇行隆帯が剝落している。	胎土、焼成は同上。色調は内外面 共に黄橙色。	2 E グリッド
134	Ⅲ b	2段の縄RLの縦回転を地文に、隆帯による 懸垂文が貼り付けられている。隆帯断面はカ マボコ状で、沈線は添えられていない。	胎土、焼成は同上。色調は、内面 が褐灰色で、外面が暗赤褐色。	3 A グリッド
135	IV	矢羽根状沈線を地文とする深鉢の胴部破片で 懸垂文も沈線による。	胎土、焼成は同上。色調は、内面 が明赤褐色で、外面が黒褐色。	3 A グリッド
136	IV a	地文に2段の縄RLが縦位に回転施文され、 箆沈線による懸垂文が施されている。	胎土、焼成は同上。色調は、内面 が褐灰色で、外面がにぶい赤褐色 を呈する。	3 A グリッド
137	IX	いずれも深鉢の破片。137は2段の縄RLが横に回転施文されている。139には刻みののせられた隆帯による渦状のモチーフが配されている。	胎土、焼成は同上で一般的。色調は、137が内外面共に黒色で、139が内外面共に黒色で、139が内外面共に明赤褐色を呈する。	3 C グリッド
138	VIIc	地文縄文の連弧文土器。	胎土、焼成は同上。色調は内外面 共ににぶい橙色。	3 C グリッド
140	II d	キャリパー状口縁を有する深鉢の口縁部破片 であり、隆帯による枠状文内に縦沈線が充填 される。	胎土、焼成は同上。色調は橙色。	3 C グリッド
141	II d	同上。	胎土、焼成は同上。色調は、内外 面共に明赤褐色。	3 Dグリッド
142	Ха	深鉢の胴部破片。地文の2段の縄RLが観察 されるのみ。	胎土、焼成は同上。色調は、内外 面共ににぶい橙色。	3 Dグリッド
143	III d	地文には集合条線が施され、蛇行隆帯がその 上に貼り付けられている。	胎土、焼成は同上。色調は、内外 面共ににぶい橙色。	3 Dグリッド
144 \$ 145	IX	いずれも深鉢だが文様構成は不明瞭。144は 沈線が添えられ、断面がカマボコ状を呈する 隆帯が貼り付けられている。145は波状口縁 の部分であり、地文のRL縄文上に沈線が3 本めぐらされている。	胎土、焼成は同上で一般的であろう。色調は、いずれも内外面がに ぶい橙色を呈する。	3 D グリッド
146 \$ 147	VII c	地文には2段の縄RLが縦位に回転施文されており、その上には箆沈線による連弧文が施される。3本単位の沈線がモチーフを描いていくのが通例だが、147は口縁に1本の沈線がめぐらされているにすぎない。	胎土、焼成は同上だが、146は器面のザラつきが激しい。色調は146が内面が黒色で、外面がにぶい橙色、147は内外面共に暗赤褐色を呈する。	3 D グリッド
148	VI	深鉢の無文部破片。	胎土、焼成は同上。色調は赤褐色。	3 Dグリッド

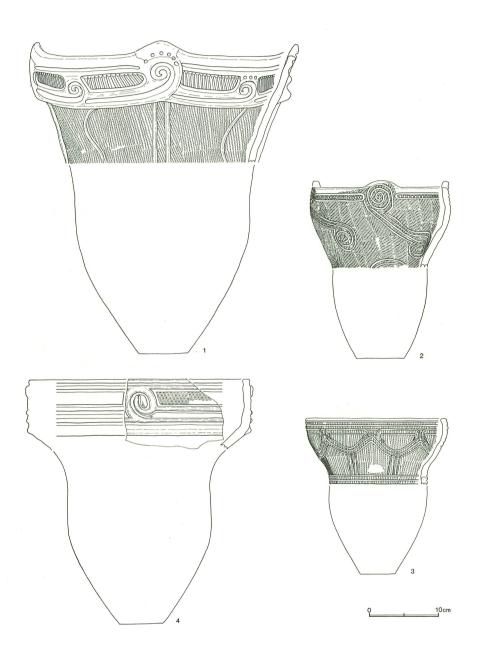


第18図 1 Eグリッド(131)、2 Dグリッド(132)、2 Eグリッド(133)、2 Aグリッド(134~136)、3 Cグリッド(137~140)、3 Dグリッド(141~148)、4 Aグリッド(149~156)、4 Bグリッド(157~166)、4 Dグリッド(167~168) 出土土器拓影図

番号	分類	器 形 ・ 文 様 の 特 徴	胎土・焼成・色調等	備考
149	II a	地文に縄文が配される、キャリパー状口縁を 有する深鉢。	胎土、焼成は同上。色調は、内面 が黒褐色で、外面が明赤褐色。	4 A グリッド
154	II d	同じく、キャリパー状口縁を有する深鉢の口 縁部破片。斜の沈線が配されている例。	胎土、焼成は同上。色調は、内外 面共ににぶい橙色。	4 A グリッド
151	Ха	胴部破片であるが口縁に近い部分に当たる。 隆帯下には2段の縄RLの縦方向への施文が 認められるのみ。	胎土、焼成は同上。色調は、内面 が赤褐色で、外面が黒褐色。	4 A グリッド
152	II b	深鉢の胴部破片。隆帯断面はカマボコ状で沈線は添えられていない。地文は2段の縄RL。	胎土、焼成は同上。色調は内面が にぶい赤褐色で、外面が灰褐色。	4 Aグリッド
155	WIa	地文が撚糸Lの連弧文土器である。	胎土、焼成は同上。色調は、内面 が暗赤褐色で、外面が黒褐色。	4 A グリッド
156	VII b	地文が集合条線の連弧文土器である。	胎土、焼成は同上。色調は内外面 共に黒色で、外面には一部赤褐色 の部分もある。	4 Aグリッド
150 153	IX	150はさらに新しい段階の資料である。沈線 下の縄文RLは横回転による。153はモチー フが全て半截竹管によっている。	胎土は普通より良好で、焼成も良い。色調は150が明赤褐色で、153が赤褐色を呈している。	4 A グリッド 150 は加曽利 E Ⅲ 式土器
157	II b	キャリパー状口縁を有する深鉢で、地文には 撚糸Rが施文されている。	胎土、焼成は一般的。色調は内外 面共に明赤褐色。	4 B グリッド
158 \$ 160	II a	キャリパー状口縁を有する深鉢で、地文には 2段の縄RLが、158では横位に、159では 縦位に回転施文されている。隆帯自体はやや 扁平化している。	胎土、焼成は同上。色調は、158は 内面が明褐色で、外面が黒褐色、 159、160は全体的に灰褐色を呈 している。	4 Bグリッド
161	II d	キャリパー状口縁を有する深鉢で、枠内には 縦沈線が充填される。	胎土、焼成は同上。色調は内面が 赤褐色で、外面がにぶい橙色。	4 B グリッド
162	IVa	地文に2段の縄RLが縦位に回転施文され、 その上に箆による懸垂文等が配されている。	胎土、焼成は同上。色調は内外面 共に灰褐色を呈する。	4 B グリッド
163 5 164	IV c	地文が集合条線の深鉢で、その上には箆沈線による文様が垂下される。	胎土、焼成は同上。色調は163が 明赤褐色で、164がにぶい橙色を 呈する。 164は輪積み部での剝離資料。	4 B グリッド
165 166	IX	いずれも深鉢。165には撚糸Lが施文されている。166の沈線文様は半截竹管による。	胎土、焼成は同上だが、166は極 めて堅緻。色調は165の内面が明 赤褐色で、外面が黒色、166は内 面が灰褐色で、外面が明赤褐色。	4 B グリッド



第19図 4 C・3 Dグリッド出土土器拓影図



第20図 第1号土壙(2~3)、第19号土壙(4)、4 Cグリッド(1) 出土土器実測図